

530
128

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



マーシャル著
大塚金之助譯



經濟學原理



自然は飛躍せず

第一編 序論
第二編 若干基本概念
第三編 欲望とその満足

分册一

大正
15. 6. 22
内交

S30-128

マシアル 經濟學原理

分冊一 第一編 序論

一九二六年既刊

第二編 若干基本概念

第三編 欲望とその満足

分冊二 第四編 生産要素

一九二六年續刊

分冊三 第五編 需要・供給・價値の一般關係

一九二五年既刊

分冊四 第六編 國民所得の分配

一九二五年既刊

坂西由藏先生
坂西數代夫人

に捧ぐ

マーシャル 經濟學原理 總目次

原著第一版序

原著第八版序

譯者小引

第一編 序論

第一章 開題

第二章 經濟學の實體

第三章 經濟學的一般化即ち經濟法則

第四章 經濟學的研究の順序と目標

第二編 若干基本概念

第一章 開題

第二章 富

第三章 生産 消費 勞働 必要品

總目次

總目次

第四章 所得 資本

第三編 欲望とその満足

第一章 開題

第二章 欲望と活動との關係

第三章 消費者需要の段階

第四章 欲望の弾力性

第五章 一物諸用途の選擇 即時使用と延期使用

第六章 價值と利用

第四編 生産要素(土地・労働・資本・組織)

第一章 開題

第二章 土地の地味

第三章 土地の地味 續論 收穫遞減傾向

第四章 人口の増加

第五章 人口の健康と強固性

第六章 産業訓練

第七章 富の増大

第八章 産業組織

第九章 産業組織 續論 分業 機械の影響

第十章 産業組織 續論 特化産業の特定地方集中

第十一章 産業組織 續論 大規模生産

第十二章 産業組織 續論 企業經營

第十三章 結論 收穫遞增收穫遞減傾向の相關關係

第五編 需要供給・價值の一般關係

第一章 開題 市場について

第二章 需要供給の一時的均衡

第三章 正常需要供給の均衡

第四章 資力の投下と振當

第五章 正常需要供給の均衡 續論 長期短期について

第六章 結合需要合成需要 結合供給合成供給

第七章 結合生産物の直接費と全部費用 販賣費 危險保險 再生産費

第八章 限界費用と價值の關係 一般原理

第九章 限界費用と價值の關係 一般原理 續論

第十章 限界費用と農業價值の關係

總目次

- 第十一章 限界費用と都會價値の關係
- 第十二章 正常需要供給の均衡 續論 收穫遞增傾向との關係
- 第十三章 正常需要供給變動の理論と極大滿足説との關係
- 第十四章 獨占理論
- 第十五章 需要供給均衡一般理論の要點

第六編 國民所得の分配

- 第一章 分配序論
- 第二章 分配序論 續論
- 第三章 勞働收入
- 第四章 勞働收入 續論
- 第五章 勞働收入 續論
- 第六章 資本利子
- 第七章 資本及び企業力の利潤
- 第八章 資本及び企業力の利潤 續論
- 第九章 土地地代
- 第十章 土地耕作制
- 第十一章 分配總觀

附錄

- 第十二章 經濟進步の一般影響
- 第十三章 進歩と生活程度との關係
- 第一附錄 自由産業企業の發達
- 第二附錄 經濟科學の發達
- 第三附錄 經濟學の範圍と方法
- 第四附錄 經濟學上に於ける抽象推理の有用性
- 第五附錄 資本の定義
- 第六附錄 物々交換
- 第七附錄 地方稅の歸著 附 政策上の若干提案
- 第八附錄 收穫遞増の場合に靜態的假定を用ふる限度
- 第九附錄 リカードの價値理論
- 第十附錄 賃銀基金説
- 第十一附錄 餘剰の若干種
- 第十二附錄 リカードの農業稅農業改良に關する説
- 數學附錄
- 件名・地名索引

マーシャル 經濟學原理分冊一 目次

原著第一版序……………二一

原著第八版序……………三三

譯者小引……………四三

第一編 序論……………一

第一章 開題……………三

一 經濟學は富の研究であると共に人間研究の一分科である。世界史は宗教力と經濟力とによつて成型された。……………三

二 貧乏は必然なるか。この問題は經濟學上最高の興味である。……………七

三 斯學は大體に於て新しく發達した。……………九

四 競争は建設的なることもあり破壊的なることもある。その建設的なる場合に於てさへ組合的協同程の福利はない。之に反して近代企業の基本特色は産業企業の自由自己信賴及び先慮……………七

五 これら諸特色と経済科学との發達小史は本編から第一附録及び第二附録に移した。……………二〇

第二章 経済学の実体……………二七

一 行爲の誘因と行爲を制する抵抗とは大凡貨幣をもつてその量を測定し得るものがある。経済学は主として之を取扱ふ。この測定は力の量についてのみ言ふ。動機の質は高貴下劣を問はず動機の本質上測定し得ない。……………二七

二 同じ一志をもつて測定する力も貧民の場合には大であり富者の場合には小であることを考慮に加へる。併し経済学は殆んど個人的特異性を離れた廣大な結論を求めざるを一般とする。……………三五

三 慣習自體が既に主として計慮的選擇に基いてゐる。……………四〇

四五 経済的動機は必ずしも利己的のもののみに限らぬ。貨幣に對する願望は貨幣以外の諸影響を排除しない。それ自體が高貴な動機から來ることもある。経済学的測定の範圍は漸次多くの利他的行爲に及ぶかも知れぬ。……………四三

六 共同行爲の動機は経済学者にとつて重大な重要性を有し、その重要性は益々重大ならんとする。……………五〇

七 経済学は主に人間生活の一面を取扱ふが、この人間生活は實在人の生活であつて假想人の生活ではない。第三附録を見よ。……………五二

第三章 経済学的一般化即ち经济法则……………五七

一 経済学は歸納演繹兩者を要する。併し目的によつて用ふる程度は違ふ。……………五七

二三 法则の本質。物理的科學の諸法则も精確性は同じくない。社会法则经济法则は複雑不正確な物理的科學の法则に當る。……………五九

四 正常といふ用語の相對性。……………六四

五 一切の科學的學説は含意的に條件を假定するが、この假設的分子は殊に经济法则に著しい。第四附録を見よ。……………七一

第四章 経済学的研究の順序と目標……………七五

一 第二章第三章の要點……………七五

二 科學的探究は實際的目標を助けはするが之に従つて配列すべきでなく、研究題目の性質によつて配列すべきである。……………七七

三 經濟學的攻究の主要題目……………七九

四 現時英吉利經濟學者の探究を促す實際問題。但し必ずしも全部斯學の範圍に屬してはゐない……………八一

五・六 經濟學者は知覺想像理性同情細心の才幹を訓練する要がある……………八五

第二編 若干基本概念……………九七

第一章 開題……………九九

一 經濟學は富をもつて欲望を満すものであり努力の結果である
と見る……………九九

二 性質用途を變ずる物を分類する困難……………一〇一

三 經濟學は日常生活の實際に従はねばならぬ……………一〇三

四 概念は明快に定義する必要があるが用語を固定的に用ひねば
ならぬ必要はない……………一〇六

第二章 富……………一一〇

一 財といふ用語の學術的用法。物質財。人財。外界財と内界財……………一一〇

可讓財と不可讓財。自由財。交換し得る財……………一一〇

二 個人の富はその人の外界財中貨幣測定可能な部分から成る……………一一四

三 併し時には富といふ用語を廣義に用ひて一切の人富を含ませてい……………一一七

四 共同財の個人取得分……………一一九

五 國民富。世界富。富に對する權利の法律的基础……………一二〇

六 價值。價格は暫定的に一般購買力を表すものとする譯者に見出原……………一二五

第三章 生産 消費 勞働 必需品……………一二八

一 人はたゞ利用を生産消費し得るのみ。物質自體を生産消費し得ない……………一二八

二 生産的といふ用語は誤解され易い。一般に避けるか或は説明を加へるべきである……………一三二

三 生存必需品と能率必需品……………一三八

四 嚴密に能率必需品たる以下を消費するは空費である。傳習的必需品……………一四二

第四章 所得 資本……………一四六

- 一 貨幣所得と營利資本……………一四六
- 二 日常企業の視點からする純所得・利子・利潤の定義。純利益・經營收入・準地代……………一四八
- 三 私人の視點から見る資本の分類……………一五三
- 四七 社會的視點から見る資本と所得……………一五五
- 八 生産性と期望性とはそれぞれ資本の需要と供給とに關する資本屬性であつて兩者對等である。第五附録を見よ……………一六六

第三編 欲望とその満足……………一七一

第一章 開題……………一七三

- 一 本編と以下三編との關係……………一七三
- 二 最近に至る迄需要と消費とは十分な注意が拂はれなかつた……………一七四

第二章 欲望と活動との關係……………一七八

- 一 多樣願望……………一七八

二三 卓越願望……………一八〇

- 四 それ自體のための卓越願望。經濟學上に於ける消費理論の地位……………一八三

第三章 消費者需要の段階……………一九〇

- 一 欲望飽滿法則或は利用遞減法則。全部利用。限界増量。限界利用……………一九〇
- 二 需要價格……………一九五
- 三 貨幣の利用の變差を考慮せねばならぬ……………一九七
- 四 一個人の需要表。『需要増加』といふ用語の意味……………一九八
- 五 市場の需要。需要法則……………二〇一
- 六 競争貨物の需要……………二〇七

第四章 欲望の弾力性……………二一二

- 一 需要の弾力性の定義……………二一二
- 二三 富者にとつて相對的に低廉な價格も貧民にとつては相對的に高いことがある……………二一四

四 弾力性を左右する一般原因……………二二一

五 時といふ要素に關聯する困難……………二二七

六 流行の變化……………二三〇

七 所要の統計を得る上の困難……………二三三

八 消費統計餘言。商人帳簿。消費者家計……………二三五

第五章 一物諸用途の選擇 即時使用と延期使用……………二四二

一・二 一個人の資力を適宜各種欲望充足の間に配分し各種購入の
限界に於て同一價格が均等の利用を測定するやうにすること……………二四二

三 現在必要と未來必要との間の配分。未來福利の割引……………二四七

四 未來快樂の割引と將來快樂し得べき事件の割引との區別……………二五〇

第六章 價值と利用……………二五六

一 價格と利用。消費者餘利。時運……………二五六

二 消費者需要と個人需要との關係……………二五八

三四 消費者餘利と市場との關係。多數人の平均を考察する場合
には性格上の個別的差異は無視していふ。若しこの多數人中……………二五八

附 録……………二八七

第一附録 自由産業・企業の發達……………二八九

一 初期文明階段に於ては外界的原因が最も力強く作用する。初
期文明階段は必然溫暖な氣候に生じた……………二八九

二 分割所有は慣習の力を強め變化に抵抗する……………二九五

三 希臘人は北方の精力を東方の文化に結び付けたが産業をもつ
て殊に奴隸のものと見た……………二九八

四 羅馬人と近代世界との間の經濟狀態の外見的類似は表面的で
ある。併しストア派哲學と後期羅馬法律家の世界的經驗とは
經濟思想經濟行爲に著しい間接影響を與へた……………三〇二

五 テュートン人は自ら征服した諸民から學ぶこと遅かつた。學……………三〇二

藝を保存したのはサラセン人である。……………三〇九

六・七 人民自治は自由都市に於てのみ存し得た。……………三一

八 騎士道と教會との影響。大軍隊の發達は自由市の覆滅を來した。併し印刷の發明、宗教改革及び新世界の發見によつて進歩の希望は再び生じた。……………三一四

九 海上發見の福利は最初先づ西班牙半島に歸したが、やがて移動して和蘭佛蘭西及び英蘭に歸した。……………三一九

一〇 英吉利人の性格は既に早く組織行爲に適する近代的才幹の徴を示した。資本主義的農業組織は資本主義的工業組織の前驅をなした。……………三二一

一一・一二 宗教改革の影響……………三二六

一三 英吉利企業は海の彼方に消費者が増大して單純型の多量財を欲したために促進された。企業者は最初單に供給を組織するのみで産業を監督しなかつたが、後にはその職工を工場に集めるに至つた。……………三三〇

一四・一五 それ以來工業労働は卸賣的に雇用され、この新組織は大害惡を伴つた。さりながらその害惡の多くはそれ以外の諸原

因に基いてをり、他方この新制度は英蘭を佛國軍隊から救つた。三三六

一六・一七 今や電信印刷機により人は自己の害惡に對し自ら救済策を決し得るに至つた。吾々は漸次集産主義形態に向つて進みつゝあり、この形態は強固な自律的個性に基く點に於て舊の形態よりも高級である。……………三四二

第二附録 經濟科學の發達……………三四九

一 近代經濟科學は間接には古代思想に負ふ所大であるが、直接には殆んど負ふ所がない。古の交易拘束はマーカンテイリストによつてやゝ解かれた。……………三四九

二・三 ファイジオクラット。アダム・スミスは彼等の自由交易説を開展し、價值理論をもつて經濟科學を統一體たらしめる共通中心とした。……………三五二

四・五 彼の後繼者は事實の研究を怠らなかつた。但しその一部の者は演繹推理に傾いた。……………三六一

六・八 さりながら彼等は人間性格がその境遇に依存するを十分に認めなかつた。この點に於ける社會主義的憧憬と生物學的研

究との影響。ジョン・ステュアート・ミル。近代業績の諸特色。……三六七

第三附録 經濟學の範圍と方法……………三八三

一 一統合社會科學は望ましいが不可能である。コントの暗示の
價值、その否定の弱味……………三八三

二 經濟學、物理學、生物學の方法……………三八六

三 説明と豫測とは反對方向に向ふ同一動作である。徹底的分析
に基く過去事實の解釋のみが將來に對する良指針となり得る。三八九

四六 訓練なき常識も往々深い分析に入り得るが、不明確な原因殊
に原因の原因に至つては殆んど之を發見し得ない。科學の機
械研究手段の機能……………三九三

第四附録 經濟學上に於ける抽象推理の有用性……………四〇六

一 經濟學は演繹推理の長い連鎖に餘地を與へぬ。數理的訓練の
效用の限度……………四〇六

二三 建設的想像は科學的勞作上の主要力である。その強さは抽
象假設を開展する所に現れずして、廣大な地域に亘つて作用し
つゝある現實經濟諸力の多種多様の影響を相關せしめる所に

現れる……………四〇七

第五附録 資本の定義……………四一三

一 營利資本は必ずしも勞働に雇傭を與へる一切の富を包含せぬ。四一三

二三 二つの本質的屬性―期望性と生産性―の相對的重要性に
關する論争は無益……………四一五

數學附録……………四二五

註解 一一九

件名・地名索引……………卷末

原著第一版序

經濟狀態は不斷に變化しつゝある。各時代はそれぞれ獨特の見方をもつて獨特の問題に望む。英蘭に於ても大陸及びアメリカに於ても、經濟學的研究が今日程熱烈に行はれたことは未だ曾てなかつた。併しこれら一切の科學的活動は次の事實を愈々明白に示したに過ぎぬ——即ち經濟科學は徐々連續的に發達する科學であり、又さうあらねばならぬといふ事實である。現代の最優秀の業績中には當初如何にも従前の業績と氷炭相容れぬかの觀を呈したものもあつた。併し貸すに時をもつてすれば自らその業績の眞價も定まり、その生硬な角も磨滅して、結局經濟科學發展の連續性には眞實の切斷のないことが分つた。諸新學説は諸舊學説を補足し敷衍し開展し時には修正し來り、又往々高調點を改めて舊學説の音調を變化した。併し之を覆へしたことは甚だ稀であつた。本書は新業績の助けを借りつゝ、現代の新問題に關聯して、舊學説の近代的改譯を提供せんとする一企圖である。その範圍と目的とは第一編に示しておい

た。經濟學的研究の主題とすべきは何であるか、又この研究に關係ある主要實際問題如何については、同編の末尾に簡単な説明を加へた。即ち英吉利の傳統に従つて、斯學の機能は經濟事實を集め整理し分析するにあり、又多様の部類の原因によつて生ずべき直接結果と終極結果とを決定するに當つて觀察經驗から得た知識を應用するにありとした。又經濟學上の法則は直接法で言ひ表す傾向叙述であつて命令法で言ひ表す倫理的指令に非ずとした。凡そ實際問題を解決し生活の指導者たるべき指針を定めるに當つては良心と常識とは種々の資料を援用する。經濟推理と言ひ經濟法則と言ふも必竟單にこの資料の一部たるに過ぎぬ。

併し經濟學者は倫理上の力をも併せて考慮すべきである。如何にも「經濟人」economic manの行爲について一抽象科學を建設せんとする企圖はあつた。經濟人とは全然倫理的影響を受けず、細心必死に併し機械的利己的に金錢的利得を追求する人の謂である。併しこれらの企圖は不成功に終つた。否、徹底的に遂行されたことさへない。蓋しこれらの企圖は眞實經濟人をもつて完

全に利己的なものとは取扱はなかつたからである。抑も家族の資を備へるといふ非利己的願望を持つて勞苦犠牲に堪ふるものとして最も信賴するに足るは即ちこの經濟人である。その正常normal動機が家族的愛情を含むことは暗々裡に常に認められてゐた。併し若しその正常動機が家族的愛情を含むならば、何故にその以外の一切利他的動機を含んではならぬか。この種の動機は階級・時場所によつて一樣な行爲を起し、一樣なるが故にこの行爲から一般原則を導き得るではないか。之を除外すべき理由は少しもないやうである。即ち本書で言ふ正常行爲とは、ある産業集合體の體員から或る條件の下に期待し得る行爲である。如何なる動機と雖もその作用が規則的でさへあれば、單にそれが利他的なりとの理由によつてその動機の作用を少しも除外するものではない。若し本書に何等かの特色があるとすれば、恐らく連續原理Principle of Continuityを右その他の場合に適用するを重視する點にあると言つていい。

本書はこの原理を種々に適用した。人の目的選擇に影響することあるべき動機の倫理的性質に適用したのみならず、人の目的遂行上の敏活・精力・企業心に

も適用した。即ち人の諸行爲に一の連続的度差ある事實を力説した。「シティメン」city menの行爲は遠大な計慮的計算に基き之を實行するに活力能力をもつてし、反對に普通人は業務的に事に處する力量も意欲もないが、この兩者の間には連続的度差がある。正常貯蓄心、或る金錢的報償のためにする正常努力心、或は最善の賣買市場を求め又は自己乃至子のために最有利の職業を求めんとする正常焦慮—その他之に類する一切の語句は一定の時と場所との特定階級所屬員に相對的でなければならぬ。併し一旦この點を理解した以上、正常價值 normal value 理論は商人銀行家の行爲に適用し得ると同じく非業務階級の行爲にも適用し得るのである。但し細目點に至つては必ずしも精確に同じではない。

又變則行動として暫定的に度外視すべき行動と正常行動との間に鋭い分界線がないと同じく、「現行」價值或は「市場」價值或は「偶然」價值 current or market or occasional value と正常價值との間にも亦た鋭い分界線はない。前者は主に瞬間の偶然事によつて動かされる價值である。之に反して正常價值は、考究すべき

經濟諸條件が無障害にその全幅結果を現すだけの時を有する場合に終極に於て ultimately 到達さるべき價值である。併しこの二者の間には超え難い分界線がある譯ではない。その間には連続的度差があつて互に明別し難い。吾々が物産取引所の毎時間の變化を考へる場合に正常と見る價值は、一年の歴史から見れば現行の變動を示すに過ぎぬ。一年の歴史から見た正常價值は、一世紀の歴史から見れば現行價值に過ぎぬ。蓋し時といふ—殆んど一切經濟問題の主要困難の中心たる—要素はそれ自體絶對に連続的だからである。自然は長期、短期など、いふ時の絶對的區別を試みてはをらぬ。反對に兩者は見分け難い度差をもつて互に連続し、甲問題についての短期は乙問題についての長期となるのである。

即ち例へば地代 Rent と資本利子 Interest of capital との差別は—必ずしも全然とは言へぬが—大體考究する期間の長短による。「自由」資本或は「流動」資本 free or floating capital 或は資本新投下については利子と見て正しいものも、資本舊投下については一種の地代—以下準地代 Quasi-rent と呼ぶ—として取扱ふ方

が適切である。又流動資本と一特殊生産部門に『沈下』された資本との間には決して明確な分界線はない。資本の新投下と舊投下との間にもこの分界線はない。互に度差をもつて續き合つてゐる。従つて土地地代 rent of land さへそれ自體一個獨立のものと思はずして一大類中の主要種と見る。尤も土地地代が理論上にも實際上にも非常に重大な特性を持つは勿論である。

更に人間自身と人間の用ふる要具との間には鋭い分界線がある。又人間の努力・犠牲の需要・供給は物質財の需要・供給に見ない特性を持つ。而かもなほ一般にこれらの物質財と雖も必竟人間の努力・犠牲の結果である。労働價値の理論と労働所産の價値の理論とは分離し得ない。これらは大なる一全體の部分である。細目點に於ける兩者の相違さへ、大部分は種類の差に非ずして程度の差であることが分る。鳥類と四足獸との形態には重大な相違があるが、而かもこれら一切動物の骨組を貫いて流れる一基本觀念 Fundamental Idea がある。同様に需要・供給均衡の一般理論は、分配・交換の中心問題の一切部分の骨組を貫いて流れる基本觀念である¹。

(1) 妻との共著で一八七九年公にした『産業經濟學』Economics of Industry に於て、吾々はこの基本的統一性の本質を明かにしやうと努めた。先づ分配理論の前に需要供給關係を暫定的に簡單に説明して、それからこの一般推理の方針を一貫して順次労働收入・資本利子・經營收入に適用した。併しこの方針の趣旨は未だ十分明白に徹してゐなかつたので、ニコルソン Nicholson 教授の示教に従つて本書では更にこの點を一層重視した。

右の外連續原理はなほ之を用語の用法にも適用した。學者は常に經濟財を明確な部類に分類し之について簡單な鋭い命題を與へやうとした。論理の精確を欲する研究者に迎合し、一見深味ある觀を呈しながら取扱ひ易い獨斷を好む世俗に迎合せんためであつた。併しかゝる誘惑に屈して自然の試みない人爲的分界線を設けるは非常な弊害を醸したやうである。經濟學説を實際の上に應用せんと企圖する場合、若しその學説の示す分界線が現實生活に存し得ぬとすれば、その經濟學説が單純・絶對であればある程その應用の企圖は益々混亂に陥る。現實生活に於ては、資本たるものと然らざるものとの間にも、必要品たるものと然らざるものとの間にも、生産的労働と然らざる労働との間にも、決し

て明白な分界線は存せぬのである。

發展についての連續觀念は經濟思想上の一切近代學派に共通の觀念である。たゞそれらの學派に主として及ぼした影響は、或はハーバート・スペンサーの著作の示す如く生物學の影響たることもあり、或はヘーゲルの歴史哲學、更に近くは大陸その他の倫理・歴史的研究の示すが如く歴史と哲學との影響たることもある。本書に述べる見解の實質に他の何ものよりも強く影響したのは右二様の影響である。併しこの見解の形式に最も強く影響したのはクルノーの『富の理論の數理的原理』(Comptes, Principes Mathématiques de la Théorie des Richesses)に出てゐる數理的連續概念である。彼の教へる所によれば、一經濟問題の種々の分子は A は B を決定し B は C を決定する等一因果連鎖の中に於て順次一は他を決定すと見るべきでなく一切分子は互に他を決定すと見るべきであつて、かく見ることは困難ではあるがこの困難に當面するは必要であるといふ。自然の作用は複雑である。その作用を單純と看做し、一連の初歩的命題によつてこの作用を叙述しやうとしても結局に於て得る所は皆無である。

私はクルノーと之に次いでフォン・テューネン von Thünen との感化を受けて次の事實を重視するに至つた。即ち精神世界に於ても物理世界に於ても、吾々の自然觀察は總體量よりも寧ろ増加量に多く關係するとの事實である。又特に一物の需要は一連續函數であつて、この需要の『限界』(2) 増量 marginal increment は安定均衡 stable equilibrium に於ては、之に對應する生産増量と平衡 balance する事實である。この點についての連續性を一目瞭然たらしめるには數學的記號或は圖形の何れかを援用せねば容易でない。圖形を用ふるには別に特殊の知識を要せぬし、又圖形は經濟生活諸條件を表現する上に於て數學的記號よりも適確であると同時に容易であることが多い。従つて附録的例解として本書の註に之を應用した。本文中の論究は毫もこれらの例解に依存するものではなく、これらの例解は省いてもいゝのである。併し經驗上これら例解の助けを借りる方が幾多の重要原理を確實に把握する上に便利なやうである。又幾多の純理論問題中には一度圖形を用ふることを覺えた者が到底他の方法を用ひて之を取扱ふを欲せぬ種類の問題もある。

(2) 私は『限界的』marginalといふ言葉をテューネンの『孤立國』Der isolirte Staat, 1828-63 から借りた。獨逸經濟學者は今日普通に之を用ひてゐる。ジェオンスの『政治的經濟學理論』Jevons, Theory of Political Economy が出た際、私は彼の言葉『最終』finalをとつた。併し漸次『限界』の方が優れてゐると確信するに至つた。

經濟問題に純粹數學を用ふる主たる效用は、自己の思想の一部を迅速・簡明・精密に書き下す一助となり、且つ結論を下すに足る——而して足るだけに止まる——前提を有すること(即ち方程式の數が未知項の數よりも多からず少なからざることを)確める一助となる點にあるやうである。併し多數の記號を用ひては筆者以外の人にとつて甚だ厄介である。尤もクルルノーの天才は、一度その手を通つた者の精神に新しき躍動を與へねば已まぬ。又經濟理論上の難問題中には、未だ僅かに外邊に觸れたに過ぎぬ問題もあるから、彼に比すべき器量ある數學者が自身のためにこれらの問題の中心に進む道を切開く場合に得意の武器を用ふるもよからう。さは言へ他人が經濟學說を長々しく數學に改譯したものを讀んで時間を費すは果して宜いか否か疑はしいやうである。さりながら數學の言葉を應用した中でも、私自身の目的に最も役立つたと思ふ僅かな範例

は附録中に追記しておいた。

一八九〇年九月

原著第八版序

第七版は殆んど第六版の再刷であつたが、第八版は第七版の再刷である。僅かに細目點を改めたに過ぎぬ。序も殆んど第七版序と同じである。

本書第一版を出した際、遠からず第二卷を出して本書を完結する旨を暗に公約してから既に三十年を経た。併し私の立てた計畫は大規模に失じた。その計畫の範圍、殊にその現實的方面は益々擴大した。現代産業革命 Industrial Revolution は一世紀前の變革に比して變化の速さも廣さも遙かに著しく、その鼓動は一々この範圍を擴大した。ために幾何もなくして私は本書を全二卷で完結する希望を棄てざるを得なくなつた。續いて立てた計畫も一度ならず變化した。一には時流の變遷と、一には他の用務と私の健康の衰弱とに因る。

一九一九年に公にした『産業と交易』 Industry and Trade は事實に於て本書の續卷である。第三卷交易金融及び産業の將來に關するものは著しく進捗してゐる。著者の力の及ぶ限りに於て經濟學上の重要問題を悉くこれら三卷に網

羅したい希望である。譯者—Money, Credit and Com-
merce, London, 1st ed. 1923.

従つて本書は經濟科學研究の一般序論たるべきものである。ロッシェー Rescher
その他の經濟學者は經濟學に關する數卷の半單行書の第一卷に基礎 Grundlagen
をおいた。本書は—全然ではないが—或る點に於てこの基礎に類するもので
ある。即ち通貨市場組織等の特殊題目を避ける。産業構造・雇傭・貸銀問題につ
いては主として正常状態を取扱ふのである。

經濟進化は漸進的である。時には政治的・大事變のためその進歩は或は停止
し或は逆行する。併しその前進運動は斷じて突發的ではない。蓋し西洋及び
日本に於てさへ、この前進運動は一部無意識的の習慣に基いてゐる
からである。天才的發明家組織者金融業者は民族の經濟構造を一撃の下に變
形したかの觀を呈することもある。併しその人の及ぼした影響中、單に表面的
一時的ならざりし部分を研究して見れば、既に永く準備時代にあつた廣大な建
設運動に百尺竿頭の一步を進める以上に殆んど出てゐなかつたことが分る。
自然の發現には最も頻繁に頗る秩序的に起つて細密に觀測し精細に研究し得

るものがある。この種の自然發現は他の大多數の科學研究の基礎たると同じ
く亦た經濟學的研究の基礎である。之に反して觀察し難い稀有な瘡癩的自然
發現は普通之を後の研究項目として特殊の取扱をなすのである。『自然は飛躍
せず』 Natura non facit saltum と云ふモットは經濟學の基礎たる書には殊に適切
である。

この二の對照を例解すれば、吾々は大企業の研究を本書と『産業と交易』と
に分載した。或る産業部門が新營業に活動地を與へる場合、該營業は發達して
一流の營業となり、恐らく若干年月の後には衰微する。すればその種産業に於
ける正常生産費 normal cost of production は『代表的營業』 a representative firm につ
いて之を評定し得る。代表的營業とは組織整頓せる個體企業に屬する内部經
濟 internal economics とその地方全體の共同組織から來る一般經濟即ち外部經濟
General or external economics とを相當に享有する營業である。かゝる營業につ
いての研究は正に基礎たる書に入るべきである。又基礎堅い政府獨占或は大鐵
道會社の獨占はその價格調節に當つて勿論主として事業主の收得高から打算

するのであるが、なほ多少顧客の福祉をも考へる。その場合事業主が價格調節の基礎とする原理の研究も同様基礎たる書に入るべきである。

併し正常行爲がその地位を轉倒する場合がある。トラストが一大市場を支配せんと腐心する場合、利益共同體の成立・解體の場合である。分けても或る特定營業が單に自家の企業的成功のみを眼目とせず、株式取引所の牽制或は市場制壓の作戦を主として營業政策を立てる場合である。これらの事項を基礎たる書で取扱ふは所を得ない。基礎の上に立てられる上。部構造の一部を取扱ふ書に譲るべきである。

經濟學者のメッカは寧ろ經濟生物學 *economic biology* であつて經濟動態力學 *economic dynamics* ではない。併し生物學的概念は力學的概念よりも複雑である。従つて基礎たる書は力學的類同性 *mechanical analogy* を比較的多く取扱はねばならず、ために何となく靜態的類同性 *statical analogy* を聯想せしめる「均衡」*equilibrium* といふ用語を屢々用ふる。この事實ある外に、本書は近代に於ける生活の正常狀態に重きをおいたため、本書の中心觀念は「動態的」に非ずして「靜態

的」であると思ふ人が出た。併し事實本書は飽く迄も運動の原因たる力を取扱ふものである。その基調は靜態的に非ずして動態的である。

さりながらその取扱ふ力は多數である。先づ一回にその二三を取り、若干の部分的解決を試みて吾々の主要研究の補助とするに如くはない。即ち吾々は先づ最初或る特定貨物について供給・需要・價格の一次的關係を遊離 *isolate* せしめる。「他の事情等しる限り」*other things being equal* といふ辭句を用ひてその以外の一切諸力の作用を停止せしめる。これら諸力を無力と假定するのではない。たゞ暫くその活動を度外視するのである。かゝる科學的考案は科學以前から存した。古來鋭敏な人々が日常生活の難問題を一々取扱つたのは意識的又は無意識的にこの方法によつたのである。

第二段に至つて右の如く假設的に眠らしめておいた諸力を漸次解き放つ。特定部類の貨物の需要供給條件は變化し始める。これら諸條件の複雑な交互作用を漸次觀察し得るに至る。次第に動態的問題の範圍は廣まり、暫定的の靜態的假定の範圍は狭まる。そして最後に到達する問題は、無數の各種生産要素

間に於ける國民分配分の分配 Distribution of the National Dividends と云ふ大中心問題である。その間動態的『代用』原理 principle of Substitution は絶えず働く。或る一團の生産要素と他の生産要素とが非常に懸け離れた産業に用ひられてゐる場合に於てさへ、その各々の需要供給が間接に互に他に影響を及ぼすは、即ちこの代用原理によるのである。

かくの如く經濟學の主として係はる所は、善きにせよ惡しきにせよ兎も角已むに已まれずして進歩する人間である。動態的、否寧ろ生物學的—概念に至る一時的補助としては斷片的靜態的假設を用ふる。併し經濟學の中心概念は生ける力と生ける運動との觀念でなければならぬ。基礎を論究する場合に於てさへ既にさうである。

社會史の或る時代には、土地所有から生ずる所得の特色が人間關係を支配した時代もあつた。恐らく再びその偉力を現す時代が来るかも知れぬ。併し現代に於ては新國が開發されたのみならず海陸運賃が低廉となつた。英吉利労働者の週賃銀が動もすると小麥半ブツシニエル譯者—一ブツシニエルは二斗一合六勺にも足りなかつ

た時代にマルサス及びリカードの用ひた言葉の意味で言ふ收穫遞減傾向は現代に於ては殆んど阻止された。而かもなほ若し人口増加率在現在の四分の一としてさへ人口増加が非常に長く續くとすれば如何。土地の凡ゆる使用—今日と同様公權の制限を受けぬと假定して—から生ずる總體收益價值 *aggregate rental value* は土地以外の一切形態の物質的財産から生ずる所得の總體を再び超過するに至るかも知れぬ。その時のこれらの財産は今日の二十倍にも上る労働を體現するであらうが、なほ右の結果を來すかも知れぬ。

第八版に至る迄版を重ねる毎に吾々はこれらの事實を力説愈々努めて來た。なほこれらの事實と相互關聯する事實であるが、各生産交易部門には一の限界 *margin* がある事實をも力説するに努めた。この限界に至る迄は一生産要素充用量の増加は一定條件の下に於て有利である。この限界を超えてその充用量を増加すれば—需要が増加せぬ限り且つ右要素と協同してその産業に用ひられる他の諸生産要素が之に伴つて適宜増加せぬ限り—收穫は遞減するであらう。同様に吾々が力説愈々努めたのは以上の諸事實と相補關係に立つ事實で

ある。即ちこの限界觀念インセンティブは一様絶對に非ずとの事實である。この觀念は考察問題の條件如何によつて異なる。殊に長期を考察するか短期を考察するかによつて異なる。今普遍的原則を掲げれば、(一)限界費用 *marginal costs* は價格を支配 *Govern* せぬ。(二)價格支配力の作用は限界に於てのみ明白に現れる。(三)長期及び永續的結果について研究を要する限界と、短期及び一時的結果について研究を要する限界とは、自らその性質・範圍を異にする。

一經濟原因の結果中には容易に探求し得ざるものと、表面に浮び出て皮相な觀察者の目を惑はすものがある。前者は往々にして反つて後者よりも重要であり且つ後者とは反對方向に向つてゐる。この周知の事實の生ずるは、實に主として右限界費用の本質の相違によるのである。これ即ち過去の經濟分析を惱ました根本困難の一である。その重要性は恐らく未だ完全には一般に認められてをらぬ。經濟學的研究が更に餘程進歩しなければこの重要性は完全に會得されるに至らぬであらう。

經濟學の素材は性質上非常に雑多であるが、新分析法はこの性質の許す範圍内に於て微増量學 *science of small increments* — 通常微分學と呼ばれてゐる — の方法を漸次且つ試験的に經濟學に導き入れやうと努めつゝある。人間が近時物理自然を解明するに至つたは大部分直接・間接にこの學に負ふ所である。經濟學上のこの新分析は未だ幼稚である。獨斷ドグマも持たず正統たるべき基準もない。未だその日も浅いため完全に一定した術語もない。用語の適否その他の従たる事項について見解が一致しないのは即ちそれが健全な生命を持つ徴である。さりながら事實に於て、この新方法によつて建設的に研究を營む人々は本質的問題について著しい調和と一致とを示してゐる。單純明確な従つて進歩した物理學上の問題で鍛へ上げた人々に於て殊にさうである。經濟學的研究の上上に於てこの方法に適する方面は狭いながらに重要である。今後一代を経ずして恐らく右の方法はこの方面に於てもはや争ふべからざる地位を得來るであらう。

△私は本書の版を重ねる毎に隨所に妻の助力・助言を受けた。毎版妻の示教細心判斷に負ふ所が多い。ケインズ *Keynes* 博士とプライス *L.L. Price* 氏とは第

一版を校正され一方ならぬ助力を賜はつた。フラックスマ、W. Tuck氏も非常な助力を賜はつた。特殊點について、場合により數版に亘つて助力を賜はつた諸氏の中から、特にアシュレー Ashley キャンナン Cannan エヂウォース Edgeworth ヘーヴリーフィールド Haverfield ビグー Pigou タウシグ Tausig 諸教授とベリー Berry 博士、フェイ O. R. Fay 氏故シデウィック Sidgwick 教授とを誌してまきた。

一九二〇年十月

Balliol Croft,

6, Madingley Road, Cambridge.

譯者小引

一 原著 本譯書は故アルフレッド・マーションアル Alfred Marshall (1842-1924) 教授の著 Principles of Economics: An Introductory Volume, 8th edition, London, Macmillan 1920, pp. XXXIV, 871. の全譯です。原著は一八九〇年に第一版を出して以來第八版(一九二〇年)に至る迄三十年間に亘つて増補され第六版迄訂正され(第八版迄)て來ました。今ケーンズ氏の左記の(2)に一部加筆して第一版以來の各版を明細に示すと次の通りです。

一八九〇年	第一版	序文二八頁及び七五四頁	二,〇〇〇部
一八九一年	第二版	序文三〇頁及び七七〇頁	三,〇〇〇部
一八九五年	第三版	序文三一頁及び八二三頁	二,〇〇〇部
一八九八年	第四版	序文二九頁及び八二〇頁	五,〇〇〇部
一九〇七年	第五版	序文三六頁及び八七〇頁	五,〇〇〇部
一九一〇年	第六版	序文三二頁及び八七一頁	五,〇〇〇部
一九一六年	第七版	序文三二頁及び八七一頁	五,〇〇〇部

一九二〇年 第八版 序文三四頁及び八七一頁 五、〇〇〇部
一九二二年 再刷 五、〇〇〇部

右の内最も重要な改訂が施されたのは第三版ケインズ氏による第五版とです。第五版は素材の配列を改めその一部を附録に移しましたその一例として第一編第一章五參照第六版以下は殆んど再刷であり、たゞ各版毎に諸微細點に數行づゝの改訂が施されたのみです。最新版であり著者生前の最終決定版たる第九版は再刷です。私は第七版當時から本書の翻譯に従事しましたが第八版が出て以來この版によつて全部を一貫することにしました。

原著の重要性と特色とは、古くは原著獨譯書―左記の(14)―のプレントナーノ教授序文、近くはケインズ氏の追悼文―左記の(5)―で明かです。原著の研究に深く入らんとする讀者は先づ右の二殊に後者を一讀されるのが便利と思ひます。プレントナーノ教授の序文で明かな通り、原著の特色はその包容力と統一力にあります。原著は當時の―従つて或る程度迄今の―經濟學に於ける一切運動の反映焦點であり刺戟源泉でした。その廣大な視野は經濟生活上經濟科學上の一切傾向を展望し、古今の一切學派に極めて懇切であり、内に歸つては痛々しき良心性をもつて自己の學說に對してゐます。即ち原著は一大なる精神者の作物であり、科學的精神の凝結です。又ケインズ氏の指摘する所によつて見れば、原著は科學的完成品に非ずして科學的機械です。既成の生産品に非ずして

この生産品を作り出すべき機械(原著者自身の用ひた言葉)です。「ジェヂョンスは釜が煮え立つのを見て子供のやうに歡喜の聲を發して叫び、マーシアルは同様に釜が煮え立つのを見て無言の儘坐り込んでエンヂンを作らうとした」二三頁のが、よくその特色を言ひ得てゐます。

一 傳記 教授の傳記については左記の(1)(5)及び(二)の參照を乞ひます。(1)は経歴であり(二)は簡單な年代記であり、共に外面的です。(5)は教授門下の最高弟の一人が内面的に教授の精神の成長迄をも辿つたもので最も信據すべきものです。マーシアル教授は一八四二年倫敦に貧しく生れ、獎學資金に頼つて高等教育を受けました。幼時から數學を好み、常に父の目を盗んで數學書をポケットに隠し、通學の途上に問題を解く習ひでした。十九歳オクスフォード大學を終り、更にケムブリッジ大學に轉じて、志を物理學に向けました。然るに教授はシヂウイックを中心とする所謂「ケムブリッジの人々」の圈内に入ると共に、その精神は漸く形而上學に向ひ、更に轉じて倫理學に入り、遂に友人の示唆に基いて經濟現實の徹底的把握の必要を感じるに至つたのです。殊に教授が使命として、倫敦貧民窟を訪るゝに及んで、悲痛にして遺る方なき生活苦惱は教授の人間愛の情熱に強く訴へました。即ちマーシアル經濟學の一大體系は室内者の産物に非ずして、貧民窟の汚穢と絶望との中に生れたと言つて極言でないのです。高弟ピグーが傾倒的熱情をもつ

て厚生經濟學の完成に一生涯を投ぜんとするに至つたも亦たこの恩師のこの點によるのです。三十五歳(一八七七年)自己の門下の一人メリー・ペリー・Mary Paley嬢と結婚し、爾來四十七年間科學の一大犠牲としての夫人の献愛は完全でした。三十七歳(一八七九年)夫人との共著 A. and M. P. Marshall, *The Economics of Industry* が出ました。ミルの系統を引いた通俗書で、主として夫人の講義案に基いてゐました。併し世界にとつて重大なものを齎すべきものは既に本書の以前にその最終の形態をとりつゝあつたのです。ケムブリッジにケムブリッジ大學經濟學正教授となつたのは四十三歳(一八八五年)です。『温かき心臓―併し冷たき頭脳』といふ言葉を掲げてフォーセット教授の後を襲つたのです。四十八歳(一八九〇年)この『原理』の第一版が出ました。なほ教授はその研究以外に、ケムブリッジ大學經濟學部學制改革案を立て、政府の諸調査委員會に参加し、その慕はしき風格をもつて人物の養成に盡力しました。六十六歳(一九〇八年)その講座を現任ビグー教授に譲つて閑地に就き、七十七歳(一九一九年) *Industry and Trade*, London, Macmillan, pp. XXIV, 875, 1st ed. 1919, 5th ed. 1923 (佐原貴臣氏譯『産業貿易論』一九二三年東京寶文館八〇八頁)を完成しました。紙型となつて三十年間教授が不斷の推敲を斷たなかつた書です。當時既に教授の風格は幾多の俊秀を驅つて經濟學の研究に向はしめ、英國經濟學界は同門の諸俊秀によつて滿されるに至り、その八十の賀の如きは歴史的光景を現出し、倫敦タイ

ムス紙は之をアダム・スミス晩年の盛儀に比したのです。續いて八十一歳(一九二三年) *Money, Credit and Commerce*, London, Macmillan, pp. XV, 369, を完成しました。五十年間光を見なかつたもので、内容は講義を通じて既に學界の公有となつてゐたものです。かくて長年の努力は形を現しつゝありましたが、續卷一冊を残して一九二四年の七月半八十二年の犠牲的生活を終つたのです。

一 風格 教授の學風風格について、最も詳細な最も理解ある追憶は左記の(5)であり、(2)は個人的印象を如實に傳へ(三)は全般的に鋭く思想傾向を述べ、(七)は風格に對する温かい憧憬であり、(八)は英國精神把握者として日本の一權威者たる友人上田辰之助君の深い考察でして、教授を個人的に知らぬ私はもはやこれ以上に言ふべきことを何物も持ちません。教授も亦た經濟學上の他の諸天才と同じく經濟學者以上に何者かであつた人です。教授の内には二つの魂がありました。一面に香氣高い人道主義的理想を把持し、生活の經濟側面を總觀する高所に住む理想家であり、他面には冷かなメスを振つて血と肉との現實を切開する科學者です。教授は晩年に至つて、初めてその天分が前者に強いことを告白しましたが、この弱き半分たる『科學者としても即ち教授自身の専門分野に於ても、優に百年に一人の世界的偉大者』(ケインズ 三二一頁)です。傳道師と學者、豫言者と科學者とは教授の内に對立し、一面に制度惡に對する強い怒となつて社會改造の焰を燃やし、他面には痛ま

しい科學的良心性を把握して靜かに知識の燈火を守つたのです。近代經濟學の用ふる一切武器を悉く最優秀の程度に吾がものとし、經濟科學の最も強固な基礎の上に立ちつゝ、經濟學者水準を高く拔んでた高所を歩んでゐた教授の如きは、古今稀に見る所です。最も高級なる憧憬を把持して一切人間内の人間性を尊重し、溫雅高潔にして人を愛し、世界の驚異を齎らしつゝも身を退けた強い謙讓によつて自身は少しも之を知らぬものゝ如く、自己の獨創を一言も誇張せず、科學的眞理の奉仕性を信じてこの獨創物を聽講者に無償で分與しました。その著書のみを通じてはこの原著者を理解し得ぬと教授を知る者が言ふのは、即ちこの消息を漏すものですが、吾々はその著書に於ても既に他の一切經濟學者に見ざる科學よりも溫かく分析よりも鋭きものを見るのであります。

一 著作書目 教授の書目(教授の著作書目及び教授に關する著書論文書目)には完全なものも全然なく、極く不完全なものも左の(1)にあるのみです。教授の著作書目には左の3があり、その内(1)と(2)とは獨立に作成されたものであり、最も詳細にして最も信據すべきものは(2)です。

1. Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 3. Aufl. Bd. VI. 1910, S. 599.
2. Keynes, J. M., Bibliographical List of the Writings of Alfred Marshall (The Economic Journal, Dec. 1924), (Pigou, Memorials of Alfred Marshall, pp. 500-8 に再刷)。

一 『故アルフレッド・マーシャル文獻集録』(擔當者不明)社會科學第二卷(一九二六年第一號(マーシャル研究)二四三—六〇頁)。

一 追悼文獻 教授の死後各國の學界はこの偉大者の喪失を惜しむと共にその風格を偲び、吾國の如く高齢者の研究努力が續かぬ國に於ては既にその生前に業績を回想する研究家も出ました。

3. Cannan, E., Alfred Marshall 1812-1921 (Economica, Nov. 1924).
4. del Vecchio, Gustavo, L'Opera di Alfredo Marshall (Giornale degli Economisti, Dec. 1924, pp. 642-5).
5. Keynes, J. M., Alfred Marshall, a memoir (The Economic Journal, Sept. 1924, pp. 311-83.) (Pigou, Memorials, pp. 1-65 に再刷(戸田省三氏譯『アルフレッド・マーシャル傳』關西大學千里山學報一九二五年五月第二十九號—十一月第三十四號)。
6. Loria, A., Alfredo Marshall (Medaglio), Roma, Formiggini 1924, p. 52.
7. Pigou, A. C., ed., Memorials of Alfred Marshall, London, Macmillan 1925, pp. IX, 518. Keynes (pp. 1-65) Edgeworth (pp. 66-73) Fay (pp. 74-7) Bemians (pp. 78-80) Pigou (pp. 81-90) 諸氏の追悼文の外に、教授の諸短篇及び科學的信書を載す。
8. Rist, Charles, Alfred Marshall (Revue d'Economie Politique, 38. Année Mai-Juin 1924, No. 3, p. 554-5).

9. Sanger, C. P., Alfred Marshall (The Nation and the Athenaeum, July 1924).
 10. Scott, W. R., Alfred Marshall 1842-1924. London, Milford, 1926. pp. 12.
 11. Tausig, F. W., Alfred Marshall (The Quarterly Journal of Economics, Nov. 1924).
 12. The Times Weekly Edition, July 17, 1924.
 - 二 石川興二氏『晩年のマーシャル先生を訪れし頃の思ひ出』『社會科學』一九二六年一月第二卷第一號(二二二—四二頁)。
 - 三 猪谷善一氏『マーシャル經濟思想に於ける綜合とその意義』『社會科學』第二卷第一號(一一—四五頁)。
 - 四 小泉信三氏『折衷家としてのマアシャル』『同誌』同號二〇三—二二頁)。
 - 五 添田壽一氏『マーシャル先生小傳』『國家學會雜誌』一九二四年一月第三十九卷第一號)。
 - 六 高島佐一郎氏『マーシャル博士第八十誕辰に際しての業績の回顧』『國民經濟雜誌』一九二三年九月第三十五卷第三號)。
 - 七 同氏『その風格と理論經濟學へのその貢獻』『社會科學』第二卷第一號(一四七—二〇二頁)。
 - 八 上田辰之助氏『アルフレッド・マアシャル』『企業と社會』一九二六年第一卷五月第二號(八一—九〇頁)。
- 一 本書の外國譯 本書の外國譯として最も早く刊行の緒については伊太利譯でした

が之は中絶しました。次に獨譯佛譯の順序で之は完結し、近く波蘭譯も出ました。

13. Principi di Economia. Biblioteca dell' Economista 145a, 147a-155bis, dispensa, Torino 1903-5.
14. Handbuch der Volkswirtschaftslehre, I. Band, nach der 4. Auflage des englischen Originals, übers. von Hugo Ephraim und Arthur Salz, mit einem Geleitwort von Leo Brentano, Stuttgart und Berlin 1905.
15. Principes d'Economie Politique, tome I. trad. par F. Sauvaire-Jourdan, Paris 1907, tome II. trad. par F. Sauvaire-Jourdan et F. Savinien Bouyssy, Paris 1909. (Bibliothèque Internationale d'Economie Politique).
16. Zasadny Ekonomiki(Grundzüge der Oekonomie) übersetzt von Cz. Znamierowski, Bd. I. Warschau 1925.

一 本書の全譯 邦譯も既に古く計畫されましたが成りませんでした。私の知る限りに於て本書の邦譯に著手されたのは二人です。その一人は井上辰九郎博士です。博士は一九二五年一月二十二日夜、經濟學攻究會のマーシャル教授追悼會の席上に於て、その努力の跡と斷念の已むなきに至つた事情とを語られました。他の一人は吉田與三郎氏です。私は一九一九年マーシャル教授の私信によつて、Y. Yoshida, (Omi)といふ篤志家が邦譯に従事してゐること、同氏に對する情誼から教授が他に邦譯の許可を與へぬこと、新

に邦譯するならば同氏との協同を教授が希望せられることを知り、ました。私は五年間歐洲と日本とに於て同氏の消息を求めましたが、遂にその機會を得ませんでした。然るに一九二四年友人安居喜一君(當時東京商科大学在學)の好意によつて、端なく氏が十五年振りに留學先たる佛國から歸朝されたのを知りました。私は直ちに氏に照會を發して、初めて氏が一九一〇年頃米國在學中から熱心に翻譯に従事されたことを知りました。惜しい事に氏の長い間の努力も中絶してゐました。氏はこの努力の集積を棄て、私の邦譯續行を激勵せられ、再び永遠に佛國に去られたのです。私は氏に對して衷心感謝の念を禁じ得ません。

一 本書の部分譯 右は本書の全譯ですが、本書の各部分には私の知る限りに於て左の如き邦譯があります。この内(九)(一〇)(一一)(一二)はマールシアル研究の一權威たる高嶋佐一郎教授の監輯に成るものです。

九 淡川康一氏譯『經濟學の發達』商業經濟論叢一九二四年第二卷以下。

一〇 小林三子氏譯『資本の定義』商業經濟論叢一九二四年第二卷。

一一 小林義雄氏譯『經濟學に於ける抽象的推理の效用』商業經濟論叢一九二四年第二卷。

一二 前馬治一氏譯『經濟學の範圍及び研究方法』商業經濟論叢一九二五年第三卷二八七—三〇八頁。

一三 鈴木清吉氏譯『マールシアル教授のリカルド價值學說批評』三田學會雜誌一九一九年第十三卷第八號、一二三—一九頁、第九號、一〇七—一四頁。

私は曾て第七版からこの書を譯出しました。京、佐藤出版部、一九一九年。恩師の激勵があつたにも拘らずこの譯書は非常に出来ませんでした。第一に私の不行届や行違から原著者の翻譯承諾を求め得ず、第二に重要な部分が未完結であり、第三に譯出の部分も自分の言明程もなく誠に不備でした。かゝる不備なものを學術的譯書として臆面もなく放置しておくのは、科學に對する重大な侮辱であるといふ思に責められました。留學歸朝—舊紙型は震災によつて煙滅してゐました—の後私は一人退いてこの譯書の完成に數年の努力を投じたのです。

一 邦譯許可 然るにその時突如として教授の訃報が日本の新聞に傳はつたのです。併し教授生前の趣旨に従ふため、吉田氏の許可を得て氏との文通の結果を精細に教授夫人に通じました。夫人は西歐學者の家庭に通有な親切と情誼とをもつて即時快諾の旨を答へられました。たゞ一九二五年中に出版書店が全部刊行せざるか或は刊行し得ざる場合には他の日本人に翻譯を許すことあるべしとの條件がついてゐました。私は之に激勵されて、二人の篤志家の努力の中絶の跡を受け、外國にも例のない本書の單獨翻譯を進めたのです。

一 補充の部分 舊譯の未譯出部分は言はず原著を織り成す横糸を半ばで断ち切るもので、原著に致命傷を與へました。原著者が自己の畢生の努力の結果たる書の中から、その體系の源泉所たる第五編の殆んど全部を抜かれたのを聞いて如何に驚愕したかは到底私共の想像も及びません。その詳細は右記(二)に誌されてゐます。〇二八―三 よつて私は先づこの缺けた部分の補充に着手しました。

一 改譯の部分 第三に既刊部分の改譯です。三四の章は全然舊譯を棄て、新たに稿を起しましたが、大部分は舊譯を訂正して行きました。併し原著の精神、原著の文體、翻譯の態度、邦語の文體についての私の解釋と意見とは全然變つてゐました。翻譯に至つては目も當てられませぬ。少年の氣鋭と思ひ上りに満ちて、原著の雅致は勿論、その精緻をも傷けました。私は出来るだけ舊譯を完膚なからしめねばならなかつたのです。全冊に亘つて一行たりと雖も原形を留めた箇所はありません。私が完全に生かし得た箇所は『經濟學者は在るが儘の人間を取扱ふ。』五頁 五といふ一文セレスだけでした。

一 翻譯 翻譯上の所期を茲に公言するのは聊か不遜です。翻譯の本旨については岩崎卯一氏の言をもつて正しきものと信じます。同氏『經濟學文獻』の邦譯二つ(『社會學雜』私は一九二六年三月三八―九五頁) 私はたゞ氏の信ずる所を目標とし、譯出に當つては譯讀の苦痛を能ふ限り自ら負擔して讀者の負擔を軽くしやうとしましたが、所期の何分の一にも達してゐません。原著の推理は

緻密精到でありその思想は深奥ですが、その文章は雄渾簡潔です。一般に――學問上の著作では文學上の著作程ではありませんが――翻譯は原著の價值を落します。一般に言語が民族精神の奥底に發してゐて到底外國語に移し得ない底のものがあるに加へ、特定者の語法には性格理想志向表現上の雅致と音色トナリとがあります。單に科學性を移すと言つても社會科學に於てはさうです。私は未だ獨逸大詩人の如く『萬事を盡してもつて完全とす』とも言ひ得ません。恐らく原著の高い薰りを少からず傷けたでせう。讀者は本譯書から推して原著を測つてはならないのです。嚴密な批評を願ひ、なほ努力して改訂して行きたいと思ひます。

一 譯語 私は舊譯の表題を『原理』としました。當時は未だ『原論』といふ言葉が多く用ひられてゐましたから、之は當時としては新譯語でした。今日の少壯學者は漸く之を『原理』『理論』『一般』といふ風に細別することを知るに至りました。その外は總て成るべく日本學界の慣用に倣つて別に自分の發意を加へません。例へば私は平生『收穫遞減法則』或は『收穫遞減法則に従ふ財』と言はずに『減收法則』『減收財』と言つてゐますが、この譯書では前の用語例に従ひました。なほ諸種の譯語については他に負ふ所が大です。例へば上田貞次郎博士の用語に従つて『協同組合』と言ひ、economic chivalry を上田辰之助君の譯語に従つて『經濟騎士道』と言つた如きです。

— 原著の誤植 原著には極く僅かですが、第八版に至る迄に訂正さるべくして訂正されてゐない箇所と原著の誤植と認むべき箇所とがあります。例へば原著一〇〇頁下四行OMとあるべきがOmとある如きです。これらは私の判断によつて訂正しましたが、原著の精細な深い研究を試みられる讀者の便宜のために二三の箇所にはその旨を補註しました。

— 献書 私は恩師坂西教授とその共同研究者たり助手たる令夫人とにこの小やかな譯書を捧げるものであります。私は先生の人格によつて初めて科學への尊き奉仕者を知り、令夫人の人格によつて初めて科學の大いなる犠牲者を知りました。私は先生を通じて初めて辛棒強き内省によつて經濟科學の精神に參照しやうとする決心を定めたのです。然るに先生は一九二四年春私の歸朝の時に既に一眼を抜き一眼は失明して、令夫人与先生周圍の高弟達とは協力してその研究の完成に盡力してをられました。今この小譯全四冊を先生と令夫人とに捧げることは、私に取つて最も痛ましき思出となりました。肖像 分冊の或るものには原著者の肖像を入れました。何れも教授夫人から贈られたもので、一は國民肖像館に納めるために作成されたものであり、一は教授夫人手づから撮影されたものです。

— 索引 索引は原著の精神に従ひ原著の索引を参照し、なほ日本人としての私共の要求

をも考へて作成しました。出来るだけ詳細を旨とし術語には一々原語を入れました。

— 正誤表 各分冊にはその前に出てゐる分冊の正誤表が挿入してある筈ですが、何かの行違で挿入してないものもあるといふことを聞きました。

— 出版と印刷 改造社の廣田義夫氏と高平始氏とは學術書出版の奉仕性に深い理解を持たれ、その勞を煩はしたことは非常です。印刷工場の諸氏に對しては、無謀に忠實性を要求したことを深く謝します。

— 最後に 私のこの微かな努力に對する諸恩師諸先輩諸友の理解が何程私を激勵したか知れません。感銘の至りです。これらの激勵は外部には現れてゐませんが、それだけ私を鞭撻する親密性を持つてゐました。その芳名は一々茲に擧げ得ない程です。福田徳三先生は渡歐前の緊張時間の際中に本譯書草稿の一部について批評示教を賜つた上、出版の事に迄心して下さり、更に世界自由思想の首都巴里にあつて専念古典研究に従事される傍ら過分な激勵の辭を送られたのです。猪谷善一氏、富永祐治君、及び未見の知人倉田興人氏、當時九州帝國大學在學の如きは、譯書と原著とを全篇に亘つて精細に並讀する勞を吝まず、諸種の訂正箇所を指摘されました。私の生活の唯一の慰安者たる弟妹達は淨書校正索引作成その他萬端細密な注意をもつて助力してくれました。なほ私をして覺束ない良心に忠實なるを得せしめた周圍の人々や、この悠長な仕事の貧しい結果を

譯者小引

待つ忍耐を示した讀者に對し、心から感謝します。

一九二六年五月五日

東京市神田區、東京商科大学、研究室 譯

者

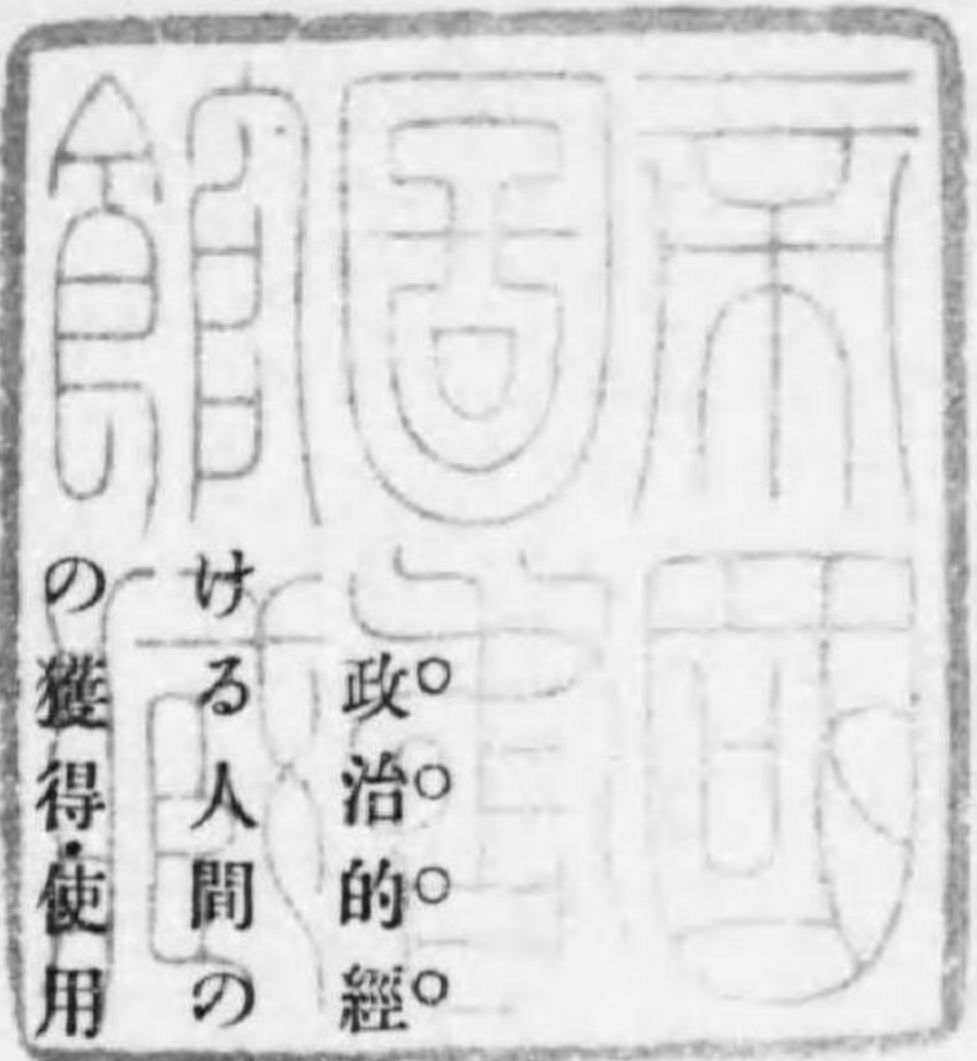
五八

第一編 序 論

第一編 序論

第一章 開題

一 經濟學は富の研究であると共に人間研究の一分科である。世界史は宗教力と經濟力とによつて成型された。



政治的經濟學 Political Economy 或は經濟學 Economics は生活上の日常業務に於ける人間の研究である。その個人的社會的行爲中、福祉 *welbeing* の物質的要件の獲得使用に最も密接に結び付いた部分を檢するものである。

、即ちそは一面に於て富の研究であり他面に於て、この他面の方が重要である。人間研究の一部である。蓋し人の性格はその作業及び之を通じて得る物質的資力によつて成型されたものだからである。人の宗教的理想は別として

經濟學は富の
研究であ
る人間研
究の一部
である

之に勝る強い影響はない。世界史の二大形成營力は宗教的營力と經濟的營力とであつた。時には熱烈な軍國的精神或は藝術的精神が暫く全盛を極めたこともあつたが、宗教的影響と經濟的影響とが一時たりとも第一線外に押しやられたことは何處にもなかつた。この二は殆んど常にその以外は一切影響を合せたものよりも重きを成した。宗教的動機は經濟的動機よりも熾烈である。併しその直接作用はそれ程迄に人生の大部面に及ぶこと稀である。蓋し人は業務によつて生活資料を求め、その最も旺盛な時期の大部分を通じて一般に彼の考慮を悩ますものは即ちこの業務だからである。この時期に於て人の性格は作られる。そはその才幹を作業上に用ふる状態により、その作業の暗示する思想感情により、作業同僚・雇主或は彼の使用人との關係によるのである。

又所得高が人の性格に及ぼす影響は所得取得状態が及ぼす影響に比して――よし弱いとしても――殆んど弱くないことが甚だ多い。一家族の年所得が千磅であるか五千磅であるかは家族生活充實の上に殆んど差異がない。併しその所得が三十磅であるか百五十磅であるかは非常な差異である。蓋し百五十磅

人の性格は
その日常作
業によつて
作られる

貧乏は墮落
を來す

Residuum 殘餘

をもつてすればその家族は完全な生活の物質的條件を有することとなり、三十磅をもつてしては之を有せぬこととなるからである。宗教家族的愛情友情の上に於ては貧民と雖も亦た最高幸福の源泉たる多くの才幹を發揮することあるは眞である。併し極度の貧乏――殊に人口密集地域の――を圍む諸條件は高級才幹を殺さうとする。英國諸大都市の殘餘階級 Residuum と呼ばれてゐた人々は殆んど交友の機會を持つてゐない。彼等は高雅と落ち着きとを全く知らない。家族生活の和合さへ之を知ること極めて少ない。宗教も往々彼等に迄は力を及ぼさないのである。勿論彼等の肉體的・心性的・徳性的不健全は一部分貧乏以外の原因からも來てゐるのであるが、貧乏はその主要原因である。

又この殘餘階級以外に食衣住足らずして生ひ立つた人が都市にも田舎にも甚だ多い。彼等は働いて賃銀を受けるため幼少時に教育を半途で廢してゐる。それ以後營養不良の肉體をもつて長時間の苦痛作業に従事してゐる。従つて高級な心性的才幹を發達せしめる機會を持たない。彼等の生活は必ずしも不健全或は不幸ではない。神と人とに對する思慕の情を悦びとし、又恐らくは感

情の洗練を生れながらにして幾分有することさへもあつて、彼等以上の物質富を有する人々の生活に比して決して恥かしくない生活を營んでゐるかも知れぬ。併しこの事あるにしても彼等の貧乏は彼等にとつて一大害悪である。殆んど無益の純粹害悪である。彼等が健康の際に於てさへその疲労は往々苦痛の域に達してをり、他面快樂と言つては殆んどない。罹病の際には貧乏に原因する苦悶は十倍する。尤も天命に甘んずる精神は彼等をしてこれらの害悪を諦めしむるに與つて力があるが、彼等をして諦めさせてはならぬ害悪もある。

△ 作業は過度であり教育は不足してをり、疲労し悶々し、安靜もなく餘暇もなく、彼等はその心性的才幹を發揮する機會を全然持たないのである。

然らば貧乏に通常伴ふ害悪の中には貧乏の必然的結果でないものもあるが、なほ大體について言へば『貧しき人々を滅すはその貧しき』[The Destruction of the poor is their poverty] 譯者―箴言第十第五章第十五節 であつて、貧乏の原因の研究はやがて人類大部分の墮落の原因の研究である。

欠

欠

權利は一層鋭く限定されてゐる。分けても慣習からの解放、自由活動と不斷の先慮と不休の企業心との發達があつたため、各種の物と各種の労働との相對價値を支配する諸原因は新たに精確となり新たに重大となつて來たのである。

四 競争は建設的なることもあり破壊的なることもある。その建設的なる場合に於てさへ組合的協同程の福利はない。之に反して近代企業の基本特色は産業企業の自由、自己信賴及び先慮である。

近代産業生活形式は一層競争的なる點に於てそれ以前の形式と異なるとは人の往々言ふ所である。併しこの言は必ずしも十分でない。競争の嚴密な意味は、殊に何等かの物の賣買價格に關して、人が互に行ふ角逐にあるやうである。この種の角逐は疑ふ迄もなく以前よりも強烈であり範圍も廣い。併し之は近代産業生活の諸基本特色から來る一の二次的の結果である。或はその偶然的結果と言つてもいゝ程である。

近代産業生活の基本特色は競争ではない

自己信頼・計慮・
獨立・先慮・
選擇・及び
先慮である

これらの特色を一言に表現して餘す所ない用語は存せぬ。これらの特色はやがて明かにする通り、一定の獨立及び自家方針の自己選擇の習性、自己信頼である。選擇と判斷とに於ける計慮であり而かもその迅速さである。將來を明察し、遠い目標に照して自身の方針を定める習性である。これらの特色は人をして互に競争せしめることもあり、事實往々にして競争せしめてゐる。併し他面に於てこれら一切種類——善も惡も——の特色は組合的協同と合同との方面に向はうとすることもあり、事實恰かも今日この方面に向はんとしつゝある。併し共同所有・共同行為に向はんとするこれらの傾向は昔のものとは全然違つてゐる。何となればこれらの傾向は慣習の結果たるものではなく、又隣人相互の結合への他律的加入の結果たるものでもないからである。そは各個人が細心の計慮を行つた上、その目的——利己的たると非利己的たるとを問はぬ——の到達に最適當と認める行動方針の自由選擇の結果である。

『競争』といふ用語は有害な臭氣をその言葉の周圍に集めるに至り、若干の利己心と他人の福祉に對する無關心との意を含むに至つた。さて昔の産業形式

競争は合意
餘りに大で
あると共に
餘りに小で
あるに過ぎ
ない
人は過去に
於けるより
は利己的で
はない

に於ては近代産業形式に於ける程計慮的利己心の少なかつたのは眞である。併し計慮的非利己心も亦た近代程にはなかつた。近代の特色は計慮にある。利己心ではない。

例へば原始社會に於ては慣習が家族の限度を擴大する。そは對隣人の若干義務——之は後の文明に於ては死滅する——を指定し、なほ異郷者敵視の態度をも指定する。近代社會に於ては家族親愛の義務は右よりも狭い範圍に集中はするが、一層強度となつた。隣人と異郷者とは更に一層同じ地位に置かれてゐる。隣人及び異郷者の兩者と行ふ日常取引に於ては公正と正直との程度は原始人がその隣人で行つた取引の或る場合に於けるよりも低い。併しこの程度は原始人がその異郷者で行つた取引に於けるよりも遙かに高いのである。即ち解き放たれたのは隣保關係の絆のみである。家族の絆は幾多の點に於て以前よりも強固であり、家族的愛情は從來よりも遙かに多大の犠牲・献身を生じ、吾々にとつて異郷者たる人々に對する同情は近代以前には曾て存しなかつた一種の計慮的非利己心の源泉として増大しつゝある。近代競争の出生地たる國こそ

は、即ち如何なる國よりも多くの部分をその所得から割いて慈善のために投じ、西印度奴隷の自由を購ふために二千萬磅を投じたのである。

凡ゆる時代に於て詩人と社會改良家とは常に古英雄の美德を稱へるに魅力ある物語をもつてし、之によつてその時代の人々を刺戟し一段と高貴な生活に導かうと試みた。併し人は大體に於て、過去に於けるよりも冷酷残忍であるとの説、或は慣習法律が自己方針の自由選擇を許した場合に人が他人の福利のため自己の幸福を犠牲とする念は現在よりも過去に於て強かつたとの説は當らぬ。歴史の記録も現代未開民族の觀察も細心に研究して見れば、かゝる説を少しも支持しないのである。民族によつては、他方面には少しも知性的受容力を發達せしめなかつた觀があり而かも近代企業家の創始力を全然持たぬものもあるが、かゝる民族の間には、市場に於てさへ狡猾な機敏を現して冷酷な取引を行ふ者の多いのを見るであらう。不運な人の窮迫に乗ずる點に於ては、如何なる商人と雖も東方諸國の穀物取引者と金貸業者との無法には到底及ばないのである。

人は過去に於けるより
不正直で
ない

更に近代に至つて生産業の上に不正直を働く新機會の生じたのは疑ふ迄もない。知識が進歩したため、羊頭を懸げて狗肉を賣る新途が發見され、實質悪化の幾多の形式が可能となるに至つた。今日の生産者は終極消費者から遠く離れてゐる。その不正行爲は迅速峻嚴な刑罰を受けない。自分の生れた村に生死する外なかつた一人が、その隣人の一人を不正直に欺瞞すれば、忽ち嚴罰が彼の頭上に下つたのとは事情が違ふ。破廉耻行爲の機會は確かに過去に於けるよりも多い。併し人がかゝる機會に従前よりも多く乗ずると考ふべき理由は少しもない。否、反對である。近代營業方法は一面に信任の習性を包藏し他面に不正直を行ふ誘惑に對する抵抗力を包藏してゐる。これらは未開人の間には到底存してゐない。淳朴な誠實と對人的忠實との事例は一切社會狀態の下に存する。併し未開國に近代型の企業を起さうとした人々は、信任を要する地位については殆んど原住民を頼み得ぬを知るのである。多大の熟練と心性的能力とを要する作業については左程でもないが、強固な徳性的性格を要する勤務については出張自國人の助力を缺くことは更に一層困難である。實質悪化

過去黄金時
代の夢は麗
しいが人を
誤る

と詐欺とは中世に於て激しかつた。當時不正行爲の陰蔽が困難であつたことを考へれば、その行はれた程度は甚だ驚くに堪へたのである。

貨幣の威力が顯著となるに至つた各文明階段に於て、詩人は單なる物質的黄金の壓力の未だ存しなかつた過去の眞の『黄金時代』を韻文に散文に描き出して樂しみとした。彼等の叙景詩的繪畫は燦爛として麗しくもあり、高貴な想像と決意とを刺戟もした。併しその繪畫は歴史的眞理を殆んど有してゐなかつた。元より小社會共同體が單純な欲望を有して自然の恩恵が豊富な資料を與へた場合には、時に物質的必要に關する心配から殆んど解放されて醜惡なる野心に誘惑されなかつたこともある。併し吾々が今の時代に原始状態にある密集人口の内部生活を觀破し得る場合には、吾々は必ず遠く離れて見て現れるよりも遙かに著しい缺乏・狹量・冷酷を見出すのである。今日の西洋に於ける程度に快適が廣く普及して而かも之に混じ來る困苦がこれ程の程度に止まる状態は、之を何處に求めても決してない。従つて近代文明を作り上げた諸力に對し、害惡を暗示する如き名を刻印すべきではないのである。

近代の競争
には二種あ
る

建設的なる
と破壊的なる

『競争』といふ用語にかゝる聯想が伴ふことは恐らく理由なきことである。併し事實としては伴つてゐる。事實に於て人が競争を難ずる場合にはその反社會的形式を高調する。それ以外の形式の存否については殆んど注意を拂はぬ。この後者の形式は精力と自發性との維持に必要不可欠であつて、之を全廢すれば恐らく社會福祉は差引毀損されるかも知れぬ程である。商人或は生産者に對し一對抗者が現れて安價に財を提供し、その價格が彼等商人・生産者に多大の利潤を與へぬ程に安ければ、彼等はこの對抗者の侵入に憤慨し不正行爲を受けたことを訴へる。安價な財を買ふ者が彼等自身よりも大なる必要を感じつゝあること、又彼等の對抗者の精力・智畧が社會的利得なることの眞なるにも拘らず、彼等はかゝる點に無頓着である。多くの場合に於て「競争規制」は人を誤り易い用語である。この用語は特權生産階級の形成を覆ひ隠してゐる。この階級は往々その結合した力を用ひて、自階級以下の階級から有能者が上進せんとする企圖を破壊する。かゝる有能者が貨物消費者に致す奉仕は大であつて、彼の競争に反對する比較的小なる集合體に與へる損害を償つて餘りある

建設的競争
合理的理想
他利他利
組合的協同
なさい
ない

場合がある。かゝる場合に於ても彼等は反社会的競争の抑制を口實として右有能者が自ら新運命を開拓する自由を剝奪するのである。

若し競争を公共善利のための非利己的作業に於ける熱烈な組合的協同に對比せしめれば、競争の最善の形式さへも相對的に害悪である。冷酷卑劣の形式に至つては唾棄すべきである。一切人が完全に有徳な世界に於ては競争は存せぬであらう。併し同時に私有財産及び一切形式の私権も亦た然るであらう。人はたゞ自己の義務のみを念とし、何人も隣人以上の生活快適品奢侈品を望まぬであらう。強大な諸生産者は容易に艱難に堪へ得るから、弱小の生産者が生産こそ彼等より少なくとも彼等以上に消費せんことを願ふであらう。彼等がかゝる思念を樂しみとして、その有する精力發明力及び熱烈な自發性を悉く擧げて社會一般の善利のために作業し、人類は對自然の争闘に於て行く所として優勝せざるはないであらう。これ即ち詩人夢想家が將來に期する黄金時代である。併し依然として人間本性に喰ひ入つてゐる缺點を無視するは、責任ある行動の上に於ては愚たる以上に悪い。

歴史一般殊に社會主義的冒險施設の歴史は次の諸點を明かにしてゐる。即ち通常人は長い期間に亘つて到底純理想的利他主義を固持し得ないこと、及びその例外はたゞ宗教的熱情家の小團體が傾倒的熱情を持つて崇高な信仰を尊び物質的俗事を意に介せぬ場合に限つて存することこれである。

勿論今日に於てさへ人はその一般に致しつゝあるよりも以上の非利己的奉仕を致し得る。經濟學者の至上の目標はこの潜在的社會資産を最も迅速に開發し最も賢明に利用し得る途如何を發見するにある。併し彼は何等の分析を行ふことなくして競争一般を難じてはならぬ。彼は人間本性の現狀に照して競争の制限がその作用に於て競争自體よりも反社会的ならざること確かめるべきである。之を確かめる迄は彼等は競争の如何なる特定表現に對しても必ず嚴正中立の態度を守るべきである。

然らば吾々は、『競争』といふ用語は近代産業生活の特徴を記述するに餘り適せぬと結論していい。吾々は一の新用語を要する。その用語は如何なる道徳的性質——善利と害悪とを問はぬ——をも含意せぬが、而かも近代の企業と産業

市民の主要目標とは認められてゐなかつた。生活理想は高かつたがその關する所は少數者に限られてゐた。價值學說の如きも、近代に於ては甚だ複雑してゐるが、當時にあつては單純な考案によつて究め得た。その考案は單純であつて殆んど一切の筋肉作業を撤廢し之に代ふるに自動機械をもつてし、この機械は單に確定量の蒸氣力と材料とを要するのみで毫も全幅の市民生活に關する所なしとしなければ、今日到底思考し得ざる底のものであつた。中世都市に於て、聰明の精神と忍苦の産業とが初めて結び付くに至つて、近代經濟學の少なからざる部分は實にその端を發しつゝあつた。併し都市は平和の裡にその運命を開拓すべくもなかつた。世界は國民全體が一致して經濟自由の試練を受けるに至る迄新經濟時代の黎明を待たねばならなかつた。

殊に英蘭はこの任務に對し漸次準備されてゐた。併し十八世紀末葉に至つて従前緩慢且つ漸進的であつた變化は突如として急速猛烈となつた。機械的發明・産業集中及び遠き市場のためにする大規模工業制は産業の舊傳統を打破し、人は各々全力を盡して自ら取引を行ふことゝなつた。同時にこれらは人口

英蘭に於ける
初期の自由
貿易の粗

6.20

の増加を刺戟し、この増加人口は工場作業場内に立つて働く席を有するのみでそれ以上には何の施設をも受けなかつた。かくて自由競争或は寧ろ産業及び企業の自由は絆を切つて、巨大な野生怪物の如く奔放な進路を驀進した。有能でありながら無教養な企業家はこの新勢力を濫用して到る所に弊害を醸した。この濫用によつて母はその天職に適せざるに至つた。それは兒童に過度の作業と疾病との重壓を加へた。それは多くの地に於て民族の資質を低下せしめた。その間にあつて救貧法の親切から起つた無思慮は工業規律の冷酷無情な無思慮よりも更に一層英吉利人の徳性的肉體的精力を低下せしめた。蓋し救貧法は英吉利人をして新社會秩序に適せしめる素質を奪ひ、自由企業の出生によつて生ずる害悪を助長しその善利を減少せしめたからである。

然るにも拘らず自由企業が不自然に殘忍な形式を現しつゝあつた時こそ、即ち經濟學者が口を極めて之を謳歌した時であつた。その理由は一には、彼等が自由企業によつて押しつけられた慣習と固定的格律との羈絆の殘忍性―今の時代の吾々が大部分を忘れて了つたもの―を明白に見てゐたことにある。又

經濟科學の
發達

一には當時英吉利人の一般傾向として政治上社會上の一切事項に於ける自由は安寧を害せざる限り如何なる代價を支拂つても得るに價するものとしてゐたことにある。併しその外になほ一には、自由企業が國民に與へつゝあつた生産諸力が、對ナポレオンへの抵抗に成功し得べかりし唯一の手段であつたことにある。従つて經濟學者は實に自由企業を無害の善利として取扱つたのではなく、當時實行し得た規制よりも小なる害惡として取扱つたのである。

リカード及びその追隨者の守る思想方向は、主として中世商人に發して十八世紀後半の英佛哲學者が踏襲した思想方向である。彼等は自由企業(即ち彼等の言ふ自由競争)の作用についての理論を展開した。この理論は幾多の眞理を含んでゐたのであつて、これらの眞理は世界の存續する限り恐らく重要であるだらう。彼等の業績は範圍こそ狭いが、その狭い範圍内に於ては驚くべき程完全である。併しその業績中の最も優れた部分は多く地代と穀物の價值とに關する諸問題―恰かも當時英蘭の運命はこれら問題の解決に繋つてゐる如くであつた―から成つてゐる。併しこの部分の多くはリカードが研究した特定形

式に於ては現在の事情に殆んど直接の關係はない。

彼等の業績中の殘餘の部分の大部分は偏狹であつた。餘りに排他的に當時の英蘭の特殊状態のみを見てゐたからである。この偏狹は反動を來した。それがため現時の如く一層の經驗と一層の餘暇と物質的資力の増大とによつて自由企業を若干制御しその害惡を生ずる威力を減じ善利を生ずる威力を増加し得るに至つて、幾多經濟學者の間には自由企業に對する一種の憎惡が生じつゝある。一部の學者はその害惡を誇張し、過去の時代の虐政と迫害との結果たるか或は經濟自由の誤解とその不當の運用との結果たる無智と困窮とを經濟自由に歸せんとさへするのである。

多數經濟學者は右兩極端の中間に立つ。彼等は幾多の諸國に於て平行的方向に向つて研究を行ひ、眞理を確定せんとする無偏見の願ひをその研究に齎しつゝある。又長く且つ苦しい勞作によらなければ苟くも何等かの價值ある科學的結果は收め得ないのであるから、彼等は此の勞作を敢てしてその研究を行はんと欲しつゝある。彼等の精神氣質訓練機會等は種々多様であるから、その

勞作も種々の方向をとり、その主力を注ぐ問題の方面も同じくない。彼等は悉く多少とも過去・現在に關する事實と統計とを集めて整理すべきである。彼等は悉く手近な事實を基礎として多少とも分析・推理を行ふべきである。併し一部の學者は前者の任務に興味を感じて引付けられ、一部の學者は後者に引付けられる。さりながらこの分業は目的の反對を含意するものではなく反つて目的の調和を含意するものである。一切學者の業績は何物かを吾々の知識に加へる。吾々が生計資料を收得する状態及びその生計資料の性質が人間生活の質と品位とに及ぼす影響を理解し得るは、この知識によるのである。

第二章 經濟學の實體

一 行爲の誘因と行爲を制する抵抗とは大凡貨幣をもつてその量を測定し得るものがある。經濟學は主として之を取扱ふ。この測定は力の量についてのみ言ふ。動機の質は高貴・下劣を問はず動機の本質上測定し得ない。

經濟學は生活上の日常業務の裡に生活し運動し思考する儘の人間の研究である。併し經濟學の主として取扱ふは人間生活の業務的方面に於て人間行動を最も力強く最も著實に左右する動機である。少しでも尊ぶべき點ある人間は各々その高級本性を業務の中に取り入れ、業務上に於ても―その以外の生活に於けると同じく―對人的愛情により義務の觀念により高き理想に對する敬虔の念によつて動かされる。又新式方法・要具の最有能の發明家及び組織者の

業務生活の
主要動機は
間接的に貨幣
をもつて測定
し得る

最優秀の精力は富のために富を愛する念によつて刺戟されず、高貴な競勵心によつて刺戟されたのは眞である。併しそれにしても日常の業務的作業の最も著實な動機は作業の物質的報償たる報酬を得んとする願望である。その報酬はそれぞれ或は利己的に或は非利己的に、或は高貴の目的のために或は卑俗の目的のために費されることもあつて、人間本性の多様性は茲に現れて来る。併しこの動機を供するは貨幣の確定額であつて、これ即ち業務生活に於ける最も著實なる動機の明確精密な貨幣測定である。この貨幣測定あるが故にこそ經濟學は人間研究の他の一切分科よりも遙かに進み得たのである。恰かも化學者の精巧な秤器あるが故に化學が他の大多數の物理的科學よりも精密 exact となつたと同じく、經濟學者の右の秤器——不精密不完全とは言ひながら——あるが故に經濟學は社會科學の如何なる他の分科よりも精密となつたのである。併し勿論經濟學は精密な物理的科學に比すべくもない。蓋し經濟學は變化して止まぬ微妙な人間本性の諸力を取扱ふものだからである(1)。

(1) 社會科學全體に對する經濟學の關係については第三附録一・二に一言するであら

う。

然らば經濟學が他の社會科學諸分科に立ち勝る長所は次の事實から来るやうに思ふ。即ちその特殊研究分野に於て精密方法を用ふる機會が如何なる他の分科に於けるよりも多いとの事實である。人間本性の願望憧憬その他の情感の中には、その外部表現が行爲の誘因として現れ、その誘因として現れるにもこの誘因の力或は量をやゝ精密に評定し測定し得るやうな形式を取るものがある。従つて或る程度迄この誘因を科學的手段によつて處理し得る。經濟學の主として取扱ふは即ちかかる願望憧憬その他の情感である。或る人の動機——力——動機自體ではない——を近似的に測定し得るに至れば、即ち科學の方法と檢證とを用ふるに似るのである。この近似的測定は或は右の人がその望む満足を得んがために正に與へんと欲する貨幣額により、或は更に彼をして一定疲労を甘受せしめるに正に要する貨幣額によつて行ふ。

茲に注意すべき肝要な點がある。即ち經濟學者は心の情感をそれ自體に於て即ち直接に評定せんとするものでなく、單にその結果によつて間接に測定せ

普通の快樂
がへた
苦痛さへ
れらが
對して
與

強へる誘因の
度比較によつ
てのみ得
るであ

んとするのみなることである。時を同じくしない心理状態は自己の心理状態
でさへも互に精確に比較し測定し得ない。他人の心理状態に至つてはその結
果によつて間接に臆測的に測定する外全然測定し得ない。勿論多様の情感の
中には人間の高級本性に属するもあり低級本性に属するもあり従つて種類を
異にする。併し假りに吾々が單に同種類の肉體的快樂・苦痛のみを眼中におく
としても、なほこれらの快樂・苦痛はたゞその結果によつて間接に比較し得るの
みなるを知るのである。事實としてはこれらの快樂・苦痛が同一人に同時に起
り來るに非ざればこの比較さへも必然或る程度迄は臆測的である。

例へば二人の人が喫煙によつて受ける快樂は直接に比較し得ない。同一人
が時を異にして喫煙によつて受ける快樂さへさうである。併し今或る人が數
片を葉卷一本に費さうか茶一杯に費さうか或は歸途徒歩せずして電車に費さ
うかと迷つてゐるとする。すれば吾々は日常の用例に従つて、この人が右の三
から均等の快樂を期待してゐると言つてよからう。

然らば吾々が單に肉體的充足を比較しやうと思ふ場合に於てさへ之を直接

に比較してはならぬ。その充足が行爲に與へる誘因によつて間接に比較せね
ばならぬ。今假りに二つの快樂の何れかを得んとする願望があり、この願望に
誘引されて同様の事情にある人々が各々正に一時間の超過作業を營まうとし、
或は同一身分にあり同一資力を有する人々が各々之がために一志を支拂はう
とするとする。この場合には、吾々はこれらの快樂は吾々の目的のために均
等であると言つていい。何となればこれらの快樂に對する願望は同様の條件
の下にある人々の行爲の誘因として均等の強さを持つからである。

かくの如く一人が日常生活に於て行ふ通り一人は心理状態をそが行爲に
與へる原動力即ち誘因によつて測定する。故に吾々が考慮に加へねばならぬ
動機之若干は人間の高級本性に属し若干は低級本性に属するといふ事實はあ
つても、この事實は少しも新しい困難を導くものではないのである。

今上述の如く自己のための二三の小充足の間に迷ふ人が暫くして歸途の路
傍の貧しい一癡疾者を思ひ出したと假定する。彼は自己のための肉體的充足
を選ばうか或は慈悲を施して他人の喜びを喜びとしやうかを決心するため

この間接比
較の類は一
切の願望に
適用し得る

若干の時を費す。彼の願望が或は前者に傾き或は後者に傾くに從つて彼の心理状態は質を變化するであらう。かゝる變化の本質を研究するは即ち哲學者の任である。

之に反し經濟學者は心理状態それ自體を研究するものではなくその表現を通じて研究するものである。若しその心理状態が行爲に對して丁度等しい誘因を與へると思へば、經濟學者はこれらをもつて彼の研究の目的のために即決的 *Prima facie* に均等であるとして取扱ふのである。彼は元より各人が常に日常生活に於て日々爲しつゝある所に從ふのであつて、たゞ一層の忍耐と思慮とにより一層細心な用意をもつて之に從ふのである。彼は吾々の本性の高級情感の實質價值と低級情感の實質價值とを比較秤量しようとするものではない。道義に對する愛と美食に對する願望とを秤量するものではない。行爲の誘因をその結果によつて評定するのであつて人が通常生活に於て爲せると全く同様である。彼は日常談論の常例に從ふものであつて、たゞ之と異なる點はその研究の進行に從つて知識の限度を明かにするため一層の用意を爲す點のみで

經濟學は日常談論の實際に從ふ

ある。彼は一定の條件の下に於ける人間一般の觀察によつて暫定的結論に到達するのであつて、個人の心性的靈性的特質を測り知らうと企てるものではない。併し彼は生活の心性面靈性面を無視するものでもない。否反對に經濟學的研究を狭く用ふる場合に於てさへ世人の願望が果して強固な公正の性格を築くに資する如きものであるか否かを知ることが重要である。又經濟學的研究を廣く用ふる場合即ち之を實際問題に應用するに際しては、經濟學者は—他の總ての人と同様—人間の終極目標を取扱はねばならず、又行爲の誘因として均等の力を持ち從つて經濟的測定の上に於て等しい諸充足の實質價值に差異あるを考慮せねばならぬ。これら測定の研究は單に經濟學の出立點たるに過ぎぬ。併しそれは出立點である(2)。

(2) 二つの快樂は何等かの事情の下に於て等しいと言ふに對して一部の哲學者は反對した。この反對は經濟學以外に於てこの句を用ふる場合にのみ當るのであつて、經濟學者が自己の問題として用ふる場合には當らぬやうである。さりながら經濟學者は快樂主義又は功利主義の哲學體系を奉ずる者であるとの信念を持つ人がある。不幸にも經濟學用語の慣例的用法は時にこの信念を暗示したのである。蓋し

經濟學者は一面に義務履行の努力に伴ふ快樂が最大快樂たるを一般に自明視しながら、『快樂』Pleasures及び『苦痛』Painsは一切行爲に動機を與ふるものであると言つたからである。かくて彼等は自ら一部哲學者の非難を買ふに至つた。義務履行の願望がこの履行より期待し得べき快樂——萬一人がこの點に想到するとして——の願望と異なることを主張するは、これら哲學者にとつては原理上の重大事である。後者を『自己満足』の願望或は『永遠我の満足』の願望と稱して恐らく不當でないにも拘らず、右の區別を立てるのである。(例へば F. H. Green, Prolegomena to Ethics, pp. 165-6. を見よ)。

倫理的論争に携はるは明かに經濟學の分でない。又行爲の一切誘因は——その意識的願望たる限りに於て——之を簡單に『満足』の願望と言つて必ずしも不當でないのは一般に認められてゐる。故に一切願望の目標——人間の高級本性に關するとは低級本性に關するとは問はぬ——を論ずる場合が生じた際には、『快樂』といふ言葉を用ひないで『満足』といふ言葉を用ふる方が恐らくいふ。満足に對する單純な對偶語は『不満足』である。併しこの言葉よりは一層簡單な而かも同様に無色な『損害』Detrimentといふ言葉を用ひた方が恐らくいふ。

さりながら茲に注意したい點がある。ベンタム Bentham の一部追隨者は(ベンタム自身は恐らくさうであるまいが)『苦痛・快樂』を右の如く廣義に用ひ、之を個人主義的快樂主義から完全な倫理的信條に移る橋渡しに用ひ、その場合一の獨立大前提を入れる必要を認めなかつた。かゝる前提が絶対に必要なるはこの場合の前提の性質か

ら言つて動かし難いやうである。たゞその前提の形式については恐らく常に異論があるであらう。一部の人は之を無上命令と見るであらう。之に對して一部の人は之を單純な一信念と見るであらう。その信念といふは、吾々の道德的本能の根源は何であらうと、この本能の徴候は人類經驗の下す判決によつて支持されて行くといふ信念である。蓋し人類經驗の下してゐる判決によれば、自尊心なくしては眞の幸福は得られず、又自尊心は人類の幸福を促進する如き生活に努力するとの條件の下に於てのみ得らるべきものだからである。

二 同じ一志^{シリング}をもつて測定する力も貧民の場合には大

であり富者の場合には小であることを考慮に加へる。併し經濟學は殆んど個人的特異性を離れた廣大な結論を求めざるを一般とする。

その外動機の貨幣測定にはなほ二三の制約があるからそれを論ずる。これらの制約の第一は人と事情との異なるに従つて同一貨幣額が表す快樂その他の満足にも變差あることを考慮する必要から生じて來る。

均等の所得を有する人々を有する人々の間に一定の格差があるに足らざるは

同一人についてさへ、時を異にすれば一志シリングによつて測定される快樂にも大小の差を生ずる(或は測定される満足が違つて来る)かも知れぬ。何となれば彼の所有貨幣額に差が生ずるかも知れず或はその受感性が變ずるかも知れぬからである(3)。又人を異にする場合にはその人々の經歷が似てをり外面的には皆似てゐても同様の事件によつて動かされる状態には往々非常の相違がある。例へば市内の小學兒童の一團體が一日の休日を田舎に出たとしても、この兒童の中の二人が精密に同種の或は同一強度の享樂を受けることは恐らくない。同じ外科手術の與へる苦痛量も人によつて相違する。二人の親の慈愛が—吾々の言ひ得る限りに於て—等しくとも、愛兒を失つた痛ましさには大差があるであらう。一般には餘り受感性のない人も特定種類の快樂苦痛に對して特別に受感性を持つてゐる。又人の天性と教育との相違によつて快樂或は苦痛に對する人の全部受容力には大差が生じて来る。

(3) Edgeworth, Mathematical Psychics 參照

従つて同額の所得を有する二人の人が之を用ひて均等の福利を收めると言

ふは安全であるまい。或はこの二人が所得の同額減少によつて均等の苦痛を蒙ると云ふもまた然り。年三百磅の所得を有する二人の各々から一磅の租税を徴する場合には、各々最も棄て易い快樂その他の満足一磅分を放棄するであらう。即ち各々正に一磅によつて測定されるものを放棄するであらう。とは言へその放棄した満足の強度は必ずしも均等に近くはないかも知れぬ。

それにも拘らず、若し吾々が個人の私情的特異性を相當相殺せしめるに足る程廣く平均を取るならば、同額所得を有する人々が一福利を得或は一危害を避けるために與へる貨幣はその福利或は危害の良測度である。假りにシェフィールド Sheffield に住む千人とリーツ Leeds に住む千人とがあつて各々年約百磅の所得を有し彼等の總てに一磅の租税を課するとすれば、シェフィールドに於てこの租税から生ずる快樂の損失その他の損害はリーツに於て生ずる損害と略ぼ均等の重要性を有すると言つて誤あるまい。又右一切の所得が一磅づゝ増加すれば、この増加は右兩市に於て等量の快樂その他の福利を増すであらう。若し彼等が總て成年男子であつて同業者たり従つて受感性氣質及び趣味教育

併し多数を考へ察する場合は、平均を求め、異なる視し一般に無視し

に於て推測上やゝ似てゐるならば、右の蓋然性は更に一層大となる。若し吾々が家族を單位とし右兩地に於て所得年百磅を有する一千家族の各々の所得が一磅減少した結果生ずる快樂の損失を比較するとしても、この蓋然性は左迄減少しないのである。

次に考慮せねばならぬ事實がある。それは一人をして何物かのために一定價格を支拂はしめるにも、その人が貧乏な場合にはその富める場合よりも強い誘因を要するといふ事實である。一志は富者の場合には貧者の場合よりも小なる快樂或は何等かの種類の満足を測定する。富者は一志を葉卷一本に費すべきか否かに迷ひ、貧民は一志を一箇月分の煙草の買入れに費すべきか否かに迷つてゐるとする。すればこの富者はこの貧民の場合よりも小なる快樂を比較秤量しつゝある。年所得百磅を有する事務員は年所得三百磅を有する事務員が到底徒歩を欲せぬやうな豪雨の日にもなほ徒歩で出勤するであらう。蓋し電車或は乗合自働車の乗車費用は貧しい人の場合には富める人の場合よりも大なる福利を測定するからである。若し貧しい人が貨幣を費せば、その費消

一定價格の富者よりも貧民に大である

後貨幣の缺乏に苦しむことは、富める人以上であらう。貧しい人の内心に於て右の費用が測定する福利は、彼以上に富める人の内心に於て右の費用が測定する福利よりも大である。

併し吾々が多數人の大集合體の行爲と動機とを考察し得る場合には、かゝる誤差の源泉も亦た少なくなる。例へば若し一銀行の破綻がリゾの住民から二十萬磅を奪ひシエフィールドの住民から十萬磅を奪つたことが分れば、吾々はリゾに於て生じた損害はシエフィールドに於て生じた損害の約二倍であつたと略ぼ推定していい。但し何等か特殊の理由があつて、右何れか一都市の銀行株主が他の一都市の銀行株主よりも富める階級なること、或は之によつて生じた雇傭の減少が兩市の労働階級に加へた壓迫の割合が同じくないと信ずべき場合には元よりこの限りでない。

經濟學の取扱ふ事件の最大部分は略ぼ均等の割合に於て一切の各種社會階級に影響する。故に二つの事件によつて生じた幸福の貨幣測度が等しければ、この二つの場合の幸福量を等量と見るは至當であり且つ通常の用例に合致す

併し之は富者よりも貧民に大である

物質的時段的に増加するの進度の相應的

るのである。なほ場所に偏することなく西洋の任意の二つの部分から任意に人の二大集合體を取れば、これら二集合體は略ぼ均等の割合に於て貨幣を生活上の高貴な用途に用ふるやうであるから、これら二集合體の物質的資力の均等増加は生活充實性及び人類の眞正進歩を略ぼ同等に増進するといふ若干の即決的 *Prima facie* 蓋然性^{蓋然性}にへあるのである。

三 慣習自體が既に主として計慮的選擇に基いてゐる。

更に他の點に移る。吾々は願望を誘因として起る行爲によつてその願望を測定すると言ふが、この場合吾々が一切行爲を計慮的であり計算の結果であると前提するものと推定してはならぬ。蓋しこの點に於ても——他の一切の點に於けると同じく——經濟學は全く日常生活にあるが儘に人を見るからである。日常生活に於ては人は一々の行爲——その衝動が人の高級本性より來ると低級本性より來るとを問はぬ——の諸結果を前もつて比較秤量するものではない(4)。

(4) 殊に「追求快樂 *The Pleasures of the Chase* と稱せられてゐるものについて眞である。この

行爲は著しく習性に支配される

充足の中には競技・娛樂・狩獵・野外橫斷乘馬競争等の輕快な競勵のみならず、之よりも眞劍な自由職業者生活・企業生活上の力争も入つてゐる。吾々は貨銀・利潤の支配原因及び産業組織形態を論ずるに當つて之を詳論するであらう。

一部の人々は放縱な氣質を持つてみて自己の行爲の動機を自身に對してさへ良くは説明し得ない。之に反して健實で思慮深い人に於ては、その衝動さへ彼が多少とも計慮的に探つて來た習性の産物である。彼は現在別に反省を爲す迄もなく他の衝動よりも先に右の衝動に對して相對的優先性を與へる。何となればその以前の機會に於て計慮的にこの相對的優先性を與へることに決したからである。これらの衝動が彼の高級本性の表現であると否と、又その衝動が良心の命令によつて起ると社會關係の壓迫から來ると、身體の欲望の要求から來るとは問はぬ。或る行動が他の行動よりも強い吸引力を持つ場合には、この吸引力はその時の計算の結果ではないにしても、それ以前之をやゝ類似の場合に行つた多少とも計慮的な決定の産物である。

さて經濟學が特に取扱ふ生活面は、人の行動が最も計慮的なる一面であり、人が特定行爲を始める前にその利益・不利益を打算すること最も頻繁なる一面である。なほ又この生活面こそは、人が習性・慣習に従ひその瞬間としては何等の計算を行はずして行動する場合にも、この習性・慣習自體が既に種々の行動の利

殊に業務的行動に於て然り

益不利益の精細細心の考査によつて生じたものであると言つて畧ぼ誤ない一面である。それは一般に貸借對照表の借方貸方を正式に算出するやうなものではないであらう。併し人は一日作業を終つて歸宅し或は社交的會合に出ては互に『甲を行つたのは引合はなかつた。乙を行つた方が良かったであらう』といふ類のことを言つたことがあらう。甲の方針が乙の方針よりも引合ふ所以は、必ずしも利己的利得或は何等かの物質的利得にありとは限らぬであらう。人は談笑の間にも屢々『この案はやゝ手数を省き或はやゝ貨幣を節約したが他の人々に對して公正でなかつた』『この案のために人に卑しく見られた』或は『この案は自分に卑しい思をさせた』といふやうなことを口にしたことであらう。

甲の部類の状態の下に成長した一の習性或は慣習が乙の部類の状態の下に於て行爲に影響する場合がある。かゝる場合にはその性質上努力と之によつて達した目的との間に何等精密な關係の存せぬは眞である。未開諸國には今なほ幼稚な習性・慣習がある。かゝる習性・慣習は、海狸ビツリスをしてその棲家に閉ぢ籠りつゝ、水流を堰き止めしめる習性・慣習に似てゐる。これらは歴史家にとつて暗示に滿ち、立法者はこれらを酌量せねばならぬ。併し近代世界の業務事項に於てはかゝる習性は迅速に死滅して了ふのである。

即ち然らば一般に人の生活中最系統的な部分は生計資料を得るに用ふる部分である。何れかの一職業に従事する一切の人々の作業は之を細心に觀察し得べく、この作業について一般的叙述を爲し他の觀察の結果と比較して檢證し得べく、又彼等に十分の動機を與へるに要する貨幣即ち一般購買力の額について數字的評定を下し得る。

人は享樂を延期して未來用途のために貯蓄することを欲せぬが、この不本意は之を蓄積富の利子によつて測定する。この利子は將來のために蓄積せしめるに足る十分の誘因を丁度與へるものである。さりながらこの測定には若干の特種困難を伴ふから、その研究は後に譲らねばならぬ。

四 經濟的動機は必ずしも利己的のもののみに限らぬ。

貨幣に對する願望は貨幣以外の諸影響を排除しない。それ自體が高貴な動機から來ることもある。經濟學的測定の範圍は漸次多くの利他的行爲に及ぶかも知れぬ。

茲に—他の如何なる場合に於けるとも同じく—吾々の念頭におかねばならぬことがある。それは貨幣を得んとの願望はそれ自體必ずしも低級な動機から起るものでないといふことである。この貨幣を自分自身のために費す場合に於てさへさうである。貨幣は目的の手段である。若しその目的が高貴ならば手段に對する願望は下劣ではない。少年が他日他人の保護を受けずして大學に入らんがため、勤勉に作業し貯蓄し得る總てを貯蓄する場合には、貨幣を熱望する。併しその熱望は下劣ではない。要するに貨幣は一般購買力である。一切種類の目的—高さもあり低さもあり、靈性的なるもあり物質的なるもある—の手段として求められるものである(5)。

貨幣を追求せしめる動機はそれ自體高貴であることもある

(5) クリフ・レスリーの名論文 *Critique Leslie, The Love of Money* を見よ。元より吾々は人が、殊に業務に費した長い生活の末期に至つて、貨幣のために貨幣を追求することを耳にする。彼等は貨幣が何を購買するかは無頓着である。併しこの場合には—他の場合と同じく—本來の目的が消滅した後にもその目的のために始めた事を行ふ習性が存続するのである。富の所有はかゝる人々に對し對同胞の權力感を與へ、一種の美望的敬意を確保し、かゝる人々はこの敬意によつて皮肉な—併し—強烈な快樂を覺えるのである。

Command over material wealth

經濟學は富を己の富に求め、富を己の富に見る者との通説は真でない

かくて『貨幣』即ち『一般購買力』即ち『物質富支配力』 *command over material wealth* は經濟科學の中心であつて經濟科學はその周圍に群り集るは真である。但しその中心たるは、貨幣或は物質富を人間努力の主要目標と見るが故ではない。或は—それ程に見ぬ迄も—之が經濟學者の研究の主要對象を與へるが故でもない。吾々のこの世界に於てはそれが大規模に人間動機を測定する一便宜手段たるが故である。若し昔の經濟學者がこの點を明かにしておいてくれたならば、彼等は悲しむべき幾多の誤解を免れてゐたであらう。すればカーライル及びラスキンが人間努力の正しき目標と富の正しき使用とについ

て與へた教訓も光彩を放つて經濟學に對する酷な攻撃によつて汚されなかつたであらう。然るにこの點を明かにしておかなかつたから、恰かも經濟學は富に對する利己的願望の外何等の動機をも顧みず、或は甚しきに至つては汚らしい利己心の政策を鼓吹するものであるかの誤つた信念を生じ、彼等はこの信念に基いて經濟學を痛烈に攻撃したのである(6)。

(6) 事實吾々は、吾々自らの經濟學と非常に似通つた經濟學があつてたゞ如何なる種類の貨幣も存せぬ一の世界を思考し得る。第二附録八及び第四附録二を見よ。

更に人間行爲の動機は人の收得する貨幣によつて與へられると言ふ場合には、決してその人が利得の念慮以外は一切念慮に對してその心を閉ぢるといふことを意味するのではない。蓋し生活上の最も純粹な業務關係さへも正直と誠意とを豫想してゐるからである。他面にこの關係の多くは寛大を當然視せぬ迄も、少なくとも卑劣の存せぬこと、及び正直な人が自己の分を盡して感ずる誇りの存することを當然視してゐる。更に人が生計資料を得るがための作業にはそれ自體快樂的なものが少なくない。社會主義者は更に一層多くの作業も

貨幣に對する願望は諸貨幣以外の諸影響を排除しない

作業自體から來る快樂及び來る如き能力本能的なものである

同様快樂的ならしめ得ないとは限らぬと主張するが、この主張には一面の眞理がある。實に一見した所無味乾燥のやうに見える業務上の作業さへ才幹を發揮し競勵本能・權力本能を満す機會を供して多大の快樂を與へることが往々である。蓋し競走用馬或は競技者が競争者に優先しやうとして全身の神經を緊張せしめてその緊張を快とする如く、工業家或は商業家も往々財産の若干増加の願望よりも寧ろ對抗者に勝たんとする希望によつて刺戟されるのである(7)。

(7) 獨逸に於て經濟學の範圍が廣く解せられてゐるについては第四附録三に一言するであらう。

五

人を一般に一職業に吸引するはその利益 advantage — 貨幣の形態をとつて現れると否とを問はぬ一であるが、この利益を悉く細心に考量するは實に經濟學者の常に實行し來つた所である。他の事情等しい限り、人は手を汚さないで済む職業、良好な社會的地位を享受する職業等を探るであらう。これらの利益は

經濟學者は物質的利得以外を以て職業利益を考へた

元より各人を精密に同様に動かすものではない迄も、大多数の人を略ぼ同様に動かすものであるから、これらの諸利益の吸引力は貨幣貸銀—これら利益の等価と見る—によつて評定し測定し得るのである。

更に周囲の人々の稱讃を博し輕蔑を避けんとする願望は行爲の一刺戟であつて、この刺戟は往々一定の時と場所とに於て或る階級の人々の間にやゝ一様性をもつて作用する。尤も地方的・一時的條件はこの稱讃願望の強度のみならずその望む稱讃を與へる人々の範圍にも著しく影響する。例へば自由職業者或は技術工は同職者の稱讃・非難に對して極めて敏感であるが、その以外の人々の稱讃・非難に對しては殆んど無頓着である。従つて經濟問題の中には注意を拂つてこの種の動機の方角を考査しその動機を相當精細に評定しなければ、その問題の論議も全然眞實性を失つて了ふ如きものが多いのである。

同僚を利用するが如くに見える事を爲さんとする願望の中にも利己心の存することがある。同様に人が自己の存命中及び死後家族を榮えしめやうとの願望にも亦た私情的の誇りといふ分子があることがある。併しそれにし

又階級的
同情を考
慮した

家族的愛情
も然り

ても家族的愛情は一般に利他主義の極めて純粹な一形式であつて、家族關係それ自體に一様性がないとすればこの愛情の作用は到底規則性の俤をも示し得ない程である。事實の問題としてはその作用は相應に規則的である。經濟學者は常にこの作用を深く考慮に入れて來た。殊に家族各員間に於ける家族所得の分配、兒童將來の方針のためにする養成失費、富を收得せる者の死後に於て家族の享樂すべき富の蓄積等に關してさうであつた。

然らば經濟學者がこの種の動機の作用を考慮に加へることを妨げるは意欲の缺如に非ずして力量の缺如である。若干種の慈善行爲を統計報告に記述することが出來、又十分廣汎な平均を取つて或る程度迄之を法則に還約し得るならば、彼等はこの事實を喜んで迎へる。蓋しこの種の動機程發作的・不規則的なものは實に稀であるが、廣汎な辛棒強い觀察の助けによつて、之に關する何等かの法則を發見し得るからである。恐らく今日に於てさへ既に、平均の富を有する十萬の英吉利人が病院・禮拜堂・傳道の支持費として與へる寄附金は可成り精細に豫測することが可能であらう。之を豫測し得る限りに於ては、病院看護婦・

宣教師その他の僧職の奉仕の需要供給に關する經濟論の基礎が存するのである。さりながら義務感情及び隣人愛に基く行爲の大部分を分類し法則に還約し測定し得ないのは恐らく常に眞であらう。經濟學の機械(研究手段)をこれらの行爲に及ぼし得ないのは即ちこの理由によるのであつて、これらの行爲が私利に基かざるが故ではない。

六 共同行爲の動機は經濟學者にとつて重大な重要性を有し、その重要性は益々重大ならんとする。

恐らく舊時の英吉利經濟學者は餘りにその注意を個人行爲の動機に限り過ぎた。併し事實としては經濟學者はその以外は一切社會科學研究者と同様、個人を主に社會有機體の體員として取扱つてゐる。寺院は之を組成する石たる以上の何物かであり、一個の人間は思想感情の一連鎖たる以上の何物かである。同様に社會の生命もその個人的社會員の諸生命の合計たる以上の何物かである。全體の行爲がその組成部分の行爲から成るは眞である。大多數の經濟問

共同行爲の重大性を大に動機は重要な性質を有し、その重要性は益々重大ならんとする。

題に於ては個人を動かす動機をもつてその最善の出立點とするも眞である。

この個人と言ふは元より一遊離原子と見る個人ではなく、何等かの特定營業集合體或は產業集合體の一員と見る個人である。併し獨逸學者が良く切論した通り、經濟學が財産共同所有及び重要目標共同追求に關聯する動機を重んじ、又一層重んじ行かんとするも亦た同様に眞である。時代誠意の増進、社會大衆智力の増進、電信印刷機その他の通信手段の威力の増進は、公共善利のためにする共同行爲の範圍を擴大して止まぬ。これらの變化は協同組合運動その他の種類の任意的團體の普及と相待つて、金錢的利得以外の多様の動機の影響の下に増大しつゝある。これらの變化は從來到底法則に還約すること不可能なりとされてゐた作用を持つ動機をも測定する機會を經濟學者に開放して止まないものである。

併し事實としては動機の多様性、動機測定の困難、これら困難を克服する方法は本書に於て取扱ふべき主要題目である。本章に於て觸れた殆んど總ての點は經濟學の主要問題の一或は數多に關聯してなほ一層詳細に亘つて論及を要

七 經濟學は主に人間生活の一面を取扱ふが、この人間生活は實在人の生活であつて假想人の生活ではない。第三附録を見よ。

經濟學者は個人を或る産業集合體の一員として研究する

暫定的に結論を下す。經濟學者は個人の行爲を研究する。併し之を個人生活との關係に於て研究するに非ずして社會生活との關係に於て研究する。從つて氣質・性格の私情的特性の如きは殆んど問題としない。經濟學者は一階級全體時には一國民全體時には單に或る一地方の住民更に頻繁には或る時と場所とに於て何等かの特定職業に従事せる人々の行動を細心に考查する。統計の助けにより或はその他の途によりその考查する特定集合體の體員が平均何程の貨幣をその望む物の價格として正に支拂はんと欲するかを確定する。或は彼等をしてその好まざる努力或は制欲を爲さしめるに何程の貨幣を提供せねばならぬかを確定する。かくして行へる動機の測定は元より完全に精確で

はない。蓋し若しさうであるとすれば經濟學は最も進歩せる物理的科學に比肩する筈であつて、實狀に於ける如く最も後れた物理的科學に伍してはゐない筈だからである。

先づ最初の場合に於ては單に供給の需要に於ける動機を測定する

併しそれにして右の測定は相應に精確であつて、經驗ある者が主としてこの種の動機に基く變化から生ずる諸結果の程度を相應に良く豫測し得るには十分である。即ち例へば彼等は或る場所に起される新生産業のために或る等級——最低等級から最高等級に至る——の勞働の供給を十分引起すに何程の賃銀支拂を要するかを非常に精細に評定し得るのである。彼等が未だ見たこともない種類の一工場を訪ふとすれば、彼等は或る特定勞働者の職業が如何なる程度の熟練職業なるか及びその職業が彼の肉體的・心性的・徳性的才幹を何程要するかを觀察するのみで、その勞働者の收める週賃銀何程なるかを——志乃至志位の誤差の程度で——言ひ當て得るのである。彼等は或る物の供給の一定の減少の結果によつて價格が何程騰貴するか及びこの價格騰貴が供給に如何なる反作用を及ぼすかを相當確實に豫測し得るのである。

後一層複雑な場合について之を測

經濟學者はこの種の單純な考察から出立し、進んで、各種産業の地方的分布を支配する原因、遠隔の地に住む人々が互に財を交換する際の條件その他を分析する。彼等は信用變動が外國貿易を左右する状態、或は更に一租税の負擔が被課税者を離れこの者から欲望充足資料を受ける者に轉嫁される程度その他を説明し豫測し得るのである。

以上總ての場合、經濟學者は在るが儘の人間を取扱ふ。それは抽象人或は『經濟人』economic manではない。肉と血との人間である。經濟學者は業務生活に於て主として主我的動機に影響される人間を大部分この動機の方面から取扱ふ。併しこの人間は同時に虚榮と輕卒以上に超越した人間でもない。さればとて作業を忠實に行ふことそれ自體を快として作業し、或は家族隣人或は國の善利のために一身を犠牲とする歡喜以下の冷い人間でもない。その人間はそれ自體としての徳義生活愛好心以下に下る人間でもない。經濟學者は在るが儘の人間を取扱ふ。併しその主として取扱ふ生活面に於ては、動機の作用は非常に規則的であつてこの作用を豫測し得る程であり、動機の原動力の評定を結

經濟學者は主として生活の取扱ふ一面が實に在る人間の生活の假想で人は生活するに於ては、人の生活の性質を測るに等しい。

經濟學が科學的根拠を得るに、その明瞭な證を爲すに、その性質と面的とある。

果によつて檢證し得る程であるから、經濟學者はその研究を科學的基礎の上に確立したのである。

蓋し先づ第一に、彼等は觀察し得る事實及び測定し記録し得る量を取扱ふ。故にこれらに關して意見の相違が起る場合にはこの相違を確實な公の記録に照して檢證し得る。かくて科學はその研究の確固たる基礎を得る。第二に吾々が或る種の諸問題を一括して經濟諸問題とするは、これら諸問題が貨幣價格によつて測定し得る動機の影響の下にある人間行動に特に關係があるからであるが、これら諸問題は可成り等質的な一團を成してゐる。勿論これらの諸問題は多數の共通對象を持つてゐる。之は場合の性質上明白である。併しその主なるもの、總てを貫く形式の基本的統一性があること、及びその結果としてこれら諸問題を一括して研究すれば一種の經濟——この經濟は各人が別々に信書を使ひに託せず、一人の郵便配達を派して信書全部を街へ配達する場合に於けると同種の經濟である——を收めることも亦た眞である。この點は先天的の priori には左程明白でないが、なほその眞たるを知るであらう。蓋しこれら諸

問題の何れかの一部類に必要な分析と組織的推理過程とは一般にその以外の諸部類にも亦た用ひ得るを知るからである。

然らば或る考察が經濟學の範圍内に屬するや否やに關する學究的探究に煩されること少なければ少ない程いゝのである。その事項が重要な場合には、能ふ限り之を考慮しやう。その事項が種々異なつた見解を引起すやうなものであり、これらの見解を精密な確定的な知識によつて檢證し得ない場合、この事項が經濟分析、經濟推理といふ一般機械(研究手段)によつて捕捉し得ぬ如きものである場合には、吾々は之をこの純粹な經濟研究の外に放置しやう。併し吾々がかくするのは、かゝる事項を包括しやうとすれば吾々の經濟知識の確實性と精密性とを減損するのみで何等之を償つて得る所がないといふ理由のみに基く。又吾々の倫理的本能と常識コンモンセンスとは終極審判者となつて經濟學その他の科學の獲得し整理した知識を實際問題に應用せんとするものであるが、この場合には吾々の倫理的本能と常識とはこの除外事項をも若干考慮に加へねばならぬことを常に忘れないのである。

第三章 經濟學的一般化即ち經濟法則

一 經濟學は歸納・演繹兩者を要する。併し目的によつて用ふる程度は違ふ。

經濟學は歸納と演繹とふの兩者を用ふる

經濟學は事實を集め之を整理し解釋しこの事實から推論を導くを任とする。殆んど一切の他の科學と同じである。『觀察と記述、定義と分類は準備行爲である。併し之によつて吾々の期求するものは諸經濟現象の相互依存關係についての知識である。』歸納と演繹とは兩者とも科學的思考に必要である。恰かも左右兩足を歩行のために要する如くである(1)。この二重の仕事のために要する方法は、經濟學特有のものではない。一切科學の共有財産である。科學的方法に關する著作は因果關係發見のためにする考案を記載してゐる。經濟學者はこれらの考案を悉く採つて用ふべきである。特に經濟學の方法と稱し得べき攻究方法は一もない。一々の方法を或は單獨に或は他の方法と組合

せてその用ふべき適所に用ひねばならぬ。將碁磐の上で作り得る組合せの數は無數であつて、精確に同じ勝負が二度行はれたといふことは恐らくない。同様に經濟學研究者は自然からその隠れた眞理を掘み出すために自然を相手に勝負を行ふのである。苟くもその勝負が争ふに價するものであるならば、全然同一の方法を全然同様に用ひた勝負といふものは未だ曾て存しなかつたのである。

(1) コンラード『國家學大辭典』Conrad, Handwörterbuch 中のシュモラー Schmoller 擔當項目『國民經濟……』Volkswirtschaft……の中。

併し目的に用ふる程度は違ふ

併し經濟學的研究の分科により又目的によつて、或は新事實の確定が緊要であつて既知の事實の説明及び相互關係の究明はそれ程緊要でない場合がある。或は又新事實を求めるよりは既知の事實についての吾々の推理を精査するを緊要とする分科もある。これらの分科に於ては、或る事件の原因中、表面に現れて目に着き易い原因が果してその眞正原因であり且つその唯一の原因であるか否か未だ甚だ不確定だからである。

分析派歴史に必要であつて互に他を補ふ

右その他の理由があるため、態度も目標も違つた研究者が兩々相並んで存することが常に必要であつた。恐らく將來に於ても常にその要があらう。一部の研究者は主として事實の確定に注意を注ぐ。他の研究者は主として科學的分析に注意を注ぐ。即ち複雑な事實を分解しその部分と部分との相互關係及びその部分と近縁事實との關係を研究する。これらの二派が常に存在して、各々自家の研究を徹底的に遂行し各々他派の研究を利用するやうにありたい。これこそは吾々が過去について健實な一般化 Generalization を行ひ、過去から將來のために信頼すべき規準を得る最上の途である。

二 法則の本質。物理的科學の諸法則も精確性は同じくない。社會法則・經濟法則は複雑・不精確な物理的科學の法則に當る。

希臘の輝かしい天才によつて物理的科學 Physical sciences は發達の域に達したが、更にその域を脱して最も進歩し來つた物理的科學の總てが必ずしも嚴密に

事實の組織に立脚する一般的な叙

述を構成し
その或るも
のを選んで
『法則』の名
を與へる

言ふ『精密科學』 exact sciences ではない。併しこれらの科學は總て精密性を目標としてゐる。即ちその總ては多數の觀察の結果を凝結せしめて暫定的敘述を試みるを目標としてゐる。この敘述は他の自然觀察によつて檢證し得るだけの確かさを持つてゐる。これらの敘述は當初は左程の權威を持たないことが多い。併し多くの獨立觀察によつて檢證されて來れば法則 Law となる。殊に來らんとする事件或は新實驗の結果の豫測に適用して成功した場合にさうである。科學はその法則の數と精密性との加はるによつて進歩する。その諸法則を益々嚴重な檢證に掛け、又その法則の範圍を擴大することによつて進歩する。この擴大によつて遂に單一の廣汎な法則に到達する。幾多の小法則はこの大法則の特殊の場合に過ぎなくなつて、この大法則はこれら小法則を包攝して之に代るのである。

苟くも或る科學が以上を遂行してゐる限り、その科學の研究者は或る條件から期待される結果或は或る既知の事件の眞正原因如何につき、自分一個の權威に勝る權威をもつて之を説き得る場合がある。(如何に偉大な思想家と雖も、自

分一個の力量のみを頼んで先行者の研究結果を無視するならば、右の權威はこの思想家の權威よりも恐らく大である)。

一部の進歩的な物理的科學の研究對象は——少なくとも今日は——完全に精密に測定し得ない。さは言へこれら科學の進歩は多數研究者の大協同に依るものである。彼等は能ふ限り精細に彼等の事實を測定し彼等の敘述を定義する。之によつて各研究者は彼以前の研究者の到達した點に出来るだけ近い點から出立し得る。經濟學はこの類の科學に進まんことを切望する。何となれば經濟學上の測定は多く不精密であり且つ決して最終的ではないが、なほ經濟學は絶えず之を一層精密ならしめやうと努め、もつて個々の研究者がその科學の權威をもつて説き得る事項の範圍を擴大しやうと努めてゐるからである。

三

然らば進んで經濟法則 economic laws の本質とその制約とを一段精細に考察したい。何等の妨害が起らなければ、各々の原因は何等か確定の結果を生む傾

科學の法則
は殆んど總
て傾向と總
てある
を以て

向を持つ。即ち引力は物體を地上に落下せしめる傾向がある。併し若し氣球内に空氣よりも軽い瓦斯が満ちてゐれば、氣球を落下せしめんとする引力の傾向に拘りなく、空氣の壓力は氣球を上昇せしめるであらう。二個の物體は相互に他を吸引する。二物體は相互の方向に向つて運動する傾向があり、何等の妨害がなければ相互の方向に運動するであらう。引力法則はこの理を叙述するものである。故に引力法則は傾向叙述である。

之は極めて精密な叙述である。數學者が航海用天體曆を算出し得る程に精密である。この曆によれば木星の各衛星が木星の陰に隠れる瞬間が分る。數學者は豫め何年か前にこの計算をして置く。航海者は之を海上に携へて自己の所在地點を知る便とする。然るに引力の如く確實に作用し精密に測定し得る經濟的傾向といふものはない。その結果引力法則に比較し得べき精確な經濟學上の法則はないのである。

併し天文學程に精密でない科學を見やう。太陽と月との作用によつて一日二回潮汐の干満がある。新月と満月とは大潮があつて上弦月と下弦月とは

單純科學の
精密法則の

複雜科學の
不精密法則の

は小潮がある。又セヴリン Severn 海峡の如く狭い灣内に差し入る潮は非常に高くなるであらう等、これらの理を説明するは潮汐學である。即ち大英國諸島の周圍の水陸分布狀態を研究して、倫敦橋或はグロースター Gloucester の或る日の最高潮時は蓋然的に probably 何時であらうか、又その潮の高さは何程であらうかを豫め算出し得る。茲には蓋然的といふ言葉を用ひねばならぬ。天文學者が木星の衛星の蝕を説くにはこの言葉を用ふる要はない。蓋し木星とその衛星とは多數の力が作用してはゐるが、その各々は確定の狀態に於て作用し、この状態は前もつて豫測し得るからである。併し天候について吾々の知る所は不十分であつて、天候の作用如何を豫言することは出來ぬ。テムズ河上流の流域に豪雨があり或は北海に北東の強風が吹けば、倫敦橋の潮は期待とは甚だ違つて來るかも知れぬ。

經濟學の法則は潮汐法則に比すべきであつて、單純精密な引力法則に比すべきでない。蓋し人間行爲は多様不確實であつて、人間行動の科學に於て爲し得る最善の傾向叙述と雖も必ず不精密不完全を免れぬからである。或は之を理

人間科學は複
雜であつて
その法則は
不精密であ
る

由としてこの題目について叙述を爲すことを一切排する人があるかも知れぬ。併しそれは殆んど人生を放擲するに等しい。人生は人間行動であり、その周圍に生成する思想と情緒とである。吾々は――高き者も賤しい者も、有識者も無學者も――總て天性の根本衝動によつて、程度の差はあるが絶えず人間行爲の道程を理解しやうと努めてゐる。この道程を吾々の目的――利己的であると没我的なると、高貴なると下劣なるとを問はぬ――のために形作らうと努めてゐる。且つ吾々は人間行爲の諸傾向について何等かの觀念を形作らねばならぬのであるから、この觀念を輕々しく形作るか細心に形作るか二つに一つの途しかない。その任務が困難であればある程、堅實不屈の辛棒強い研究の必要も大である。最も進歩せる物理的科學の收めた經驗を援用する必要も大である。又人間行爲の諸傾向について能ふ限り練りに練つた評定即ち暫定的法則を構成する必要も大である。

四 正常といふ用語の相對性。

然らば「法則」といふ用語は多少とも確實な多少とも明確な傾向の一般命題即ち一般叙述を意味するに外ならぬ。科學はそれぞれかゝる叙述を多く行つてゐる。併しその叙述の總てに形式的性質を與へて法則と呼ぶのではない。否、呼ぶことは出来ない。その中から選り出さねばならぬ。その選擇は純然たる科學的考慮よりも寧ろ實際的便宜に準據する場合が多い。假りに茲に何等かの一般叙述がある。度々之に言及しやうとすれば、之を長々と引用するのは甚だ煩しい。寧ろ一の新たな形式的叙述と一の新たな術語名とを如へて多少論究の負擔を増すに如かないことになる。この時その一般叙述に法則といふ特殊の名を與へる。然らざる場合にはこの名を與へないのである(2)。

(2) 『自然法則と經濟法則』[natural and economic lawsとの關係を餘蘊なく論究したのはノイマン Neumann であつた(Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 1892)。傾向叙述は自然科學に於ても經濟科學に於ても極めて重要な地位を占めてゐるが、之を言ひ表すには法則 Gesetz 以外に言葉がないといふのが氏の結論である (p. 461)。なほワグナー Wagner, Grundlegung, §§ 86-91 を見よ。

病氣もなくして長命を保つも變則である。雪解け頃のライン河の水嵩は正常水準よりも高まる。併し乾燥した寒い春にこの正常水準よりも高まること例年よりも少なければ(その季節としては)水嵩は變則的に低いと言つていい。總てこれらの場合に正常結果とは文脈の暗示する傾向の成果として期待していい結果である。言ひ換へれば文脈に適正な『傾向叙述』に従ふものであり法則[○]或は規範に従ふものである。

正常經濟行爲とは或る條件の下に(これら條件が持續的な限り)一産業集合體の體員から結局に於て期待していい行爲であると言ふは、右の視點から言ふのである。英蘭の大部分に於て煉瓦積工が一時間十片^{ペンス}では作業を欲するが七片では作業を拒むは正常的である。ヨハネスブルグに於ては煉瓦積工が一日一磅より甚だしく少なければ作業を拒むべきが正常的であるかも知れぬ。眞實新鮮な卵の正常價格 normal Price は季節について何事をも言はぬ場合には、一片^{ペニ}としていい。而かもなほ三片は都市に於ける一月中の正常價格であるかも知れぬ。さすれば二片は『季節外れ』の暖氣によつて生じた變則的に安い價

即ち正常状態は高い貨物
銀の意を含有
むことあり
低い貨物
意を含有
ともある

格であるかも知れぬ。

更にもう一つの誤解を防がねばならぬ。この誤解は自由競争の無障害の作用に基く諸經濟結果のみをもつて正常的であるとする觀念から生じて来る。

熱烈な競争
の存在の意
を含有する
もありその
存在せざる
意を含有す
ともある

併しこの用語は完全な自由競争が存在せず又存在すると推定することさへ殆んど出来ぬ状態に往々適用せねばならぬ。又自由競争の最も盛な場合に於てさへ各事實及び傾向の正常状態は競争の一部でもなく競争に近似することさへない致命的分子を含むであらう。即ち例へば小賣業・卸賣業及び株式取引所・綿花取引所に於ける多數取引の正常制度は、立會人なくして結んだ口頭契約も徳義的に履行されるであらうとの推定の上に立つてゐる。この推定を至當に下し得ない諸國に於ては西洋の正常價值學說の若干部分は適用されない。更に各種株式取引所證券の價格は『正常的に』normally 通常の買手のみならずなほ仲買人自身の愛國感情に左右される。その他之に準ずる。

最後に經濟學上の正常行爲は道德上正當の行爲であると誤つて推定する者が時々ある。併し之はその行爲を倫理的視點から判断するとの意が文脈中に

含まれてゐる場合に於てのみかく解すべきである。吾々が世界の事實を在るが儘に——在るべきが如くに非ず——考察しつゝある場合には、吾々が全力を投じて絶滅すべき多くの行爲の如きをも視野の中に置く事情に『正常』の行爲であると見るべきであらう。例へば一大都市の最貧民の多數の正常状態は、敢爲の精神を缺き、他に一層健康的な不潔ならざる生活を提供する機会があつても之を利用しやうと欲せぬ。その悲惨な周圍を脱するに要する肉體上心性上徳性上の強固性を持たぬ。甚だしい低率の賃銀にも喜んで燐寸箱を作らんとする勞働の大供給の存することは正常的である。恰かも四肢の扭れることがストリキニーネ服用の正常結果であるのと同様である。吾々は諸傾向の法則を研究せねばならぬのであるが、右は即ちこれら諸傾向の一結果であり、悲しむべき一結果である。これ經濟學がその以外の少數科學と共通に有する一特異性を例解するものである。即ちこれら科學の素材の本質は人間の努力によつて改め得るものである。科學は右の本質を改め之によつて自然の法則の作用を改める道德的或は實際的戒告を與へることもある。例へば經濟學は單に燐寸

正當行爲常
に必ずしも
正當行爲で
ない

箱製作の如き作業を爲し得るのみなる者を絶滅して有能作業者を之に代へる實際的手段を教示することがある。恰かも生理學が牛の品種を改變して早熟・多肉・輕骨の品種とする手段を教示する如くである。信用變動・物價變動の諸法則は豫測力の増進によつて著しく變化を受けるに至つた。

更に『正常』價格が一時的價格或は市場價格 *temporary or market price* と對照される場合には、この用語は一定諸條件の下に於て或る傾向が結局に於て強く現れることを言ふのである。併し之は若干の困難な問題を生ずるのであつて、これらの問題は後に譲りたい(3)。

(3) これらの問題は第五編殊に第三章・第五章に論究した。

五 一切の科學的學説は含意的に條件を假定するが、この假設的分子は殊に經濟法則に著しい。第四附録を見よ。

學的或假定的條件
的或假定的條件
的或假定的條件
的或假定的條件

學は或る原因から生ずる結果を研究せんとするのであるが、その以外は一切科學と同様、之を絶對的に研究せんとするものではなく、他の事情等し、*other things are equal* との條件及びその原因が無障害に結果を引起し得るとの條件に従つて研究せんとするものである。殆んど一切の科學的學説は、細心に形式的に叙述されてゐる場合には他の事情等しとの意を示す何等かの但書を含まないものはないのを知るであらう。問題となる原因の作用は遊離されてゐるものと推定してをり、或る結果をこの原因に歸着せしめてゐる。併しそれは右の如く明白に入るを許した原因以外には如何なる原因も入るを許さぬとの假設の上、於てのみである。さりながら原因がその結果を生ずるためには時を與へねばならぬとの條件が經濟學上の大困難の源泉たるは眞である。

蓋しこれら原因の働きかける素材、否恐らくはその原因自體さへもその間に變化してゐるかも知れぬからである。又記述せんとする諸傾向はその全幅の作用を現す『結局』迄伸びないこともあるからである。この困難は何れ後に詳論するであらう。

併し經濟學
に於てはこ
の含意的條
件を高調せ
ねばならぬ

一法則の中に含意されてゐる條件句は必ずしも不斷に之を繰返さない。讀者自らの常識が之を補ふのである。經濟學に於ては他の諸科學に於けるよりも頻繁に之を繰返す必要がある。何となればその學説は何等の科學的訓練を有せぬ人々、又恐らくは學説を單に人の口から文脈と切り放して聞き覚えてゐる人々に引用され易い——この點は如何なる他の科學の學説に於けるよりも多い——からである。日常の談論が科學的著作よりも形式に於て單純である一理由は、談論に於ては安んじて條件句を省略し得ることにある。何となれば聞く者が自ら之を補はなければ吾々は速かにその誤解を發見して訂正するからである。アダム・スミス *Adam Smith* その他經濟學上の多くの昔の著述家は談論の用例に従ひ條件句を省略したから外見上は單純となつた。併し之が原因となつて彼等は不斷に誤解されるに至り、無益の論争に時と勞との大空費を來した。彼等の外見上の平易には例へ利があるにしても、之を購ふに餘りに高價を支拂つたのである(4)。

(4) 第二編第一章參照。

經濟分析と一般推理との適用範圍は廣いものではあるが、なほ各時代と各國とはそれぞれ獨特の問題を有し社會状態の一々の變化は經濟學理の新開展を要求するが如くである(5)。

other things being equal

(5) 經濟學の一部には相對的に抽象的或は純粹、abstract or pure な部分がある。何となればこの部分は廣汎な諸一般命題を主して問題とするからである。蓋し一命題を廣く適用するにはその命題は必然深く細目に亘つてはならぬからである。それは特定の場合に適應し得ない。若しこの命題が何事かを豫測せんとするならば、それは強力な條件句に服さねばならぬ。その條件句に於ては「他の事情等しい限り」といふ句に非常に重大な意味を與へる。

右以外の部分は相對的に應用的、applied な部分である。何となれば右の場合よりも狭い問題を一層深く細目に亘つて取扱ふからである。これらの部分は地方的、一時的分子を一層考慮し、經濟状態をその以外の生活條件と一層密接濃厚に關聯せしめて考察する。即ち一般的意味に於ける應用銀行學と、一般銀行技術上の廣汎な原則或は準則との間には僅かに一步の差あるのみである。之に對して應用銀行學上の特定地方問題と之に該應する技術上の實施原則或は準則との間にある一步の差は更に少ないのである。

第四章 經濟學的研究の順序と目標

一 第二章第三章の要點。

第二章第三
章の要點

吾々は經濟學者が事實を貪り求めねばならぬ所以を明かにした。併し事實はそれ自體では何事をも教へない所以をも明かにした。歴史は前後生起と同時生起とを語るが、之を解釋し之から教訓を導き得るは理性あるのみである。之に當つて爲すべき事は甚だ多様であるため、訓練ある常識コンモンセンスに依頼して取扱はねばならぬ場合が少なくない。訓練ある常識は一切實際問題の終極裁決者である。經濟科學は常識の運用たるに過ぎない。たゞ特定事實を集め之を整理し之から推論を導く勞を容易ならしめるため、手段として組織的分析と一般推理との助けを借りる。尤もかゝる分析推理の範圍には常に限りがあり、又常識の助けがなくては其の運用は無益であるが、なほ之を用ふれば困難な諸問題に一段深く突き進み得るのであつて、之を用ひないのには勝るのである。

經濟法則は或る條件の下に於ける人間行爲の傾向についての叙述である。これらの法則は物理的科學の法則が假設的であるといふと同じ意味に於てのみ假設的である。蓋し物理的科學の法則も亦た條件を明かに藏し或は含意してゐるからである。併しこの條件を明白にするは物理學に於けるよりも經濟學に於て一層困難である。又之を明白にしない場合の危険も一層大である。元より人間行爲の諸法則は引方法則の如く單純明確でなく、又明白には確定し難い。併しその中には複雑な研究對象を取扱ふ自然科学の法則と同列に伍するものも多い。

人間行爲の中には測定可能の動機によつて支配されること最も多い部分がある。従つてこの部分は如何なる他の部分よりも系統的推理と分析とに適してゐる。經濟學は主としてこの部分を取扱ふ。經濟學が一分立科學として存在する根據は茲にある。元より吾々は如何なる種類の動機——高級なると低級なるとを問はぬ——であらうとも、之を動機そのものとしては測定し得ない。吾々は單にその動機の發動力を測定し得るに過ぎぬ。貨幣は斷じてこの力の完

全な測度ではない。先づその力の働く周圍の一般條件、殊に論究の下にある行爲を爲す者の貧富を細心に考慮せねばならぬ。この注意を拂はなければ貨幣は到底相當の良測度とさへもならぬのである。併し細心の用意さへ加へれば貨幣は先づ相當の良測度となつて、人間生活の様式を定める大部分の動機の發動力を測定するのである。

理論の研究は事實の研究と相伴つて進まねばならぬ。そして大多數の近代的問題を取扱ふには近代的事實が最も有用である。蓋し遠い過去の經濟記録は或る點に於て乏しく且つ信用し難いからであり、又昔の經濟状態は近代の經濟状態とは全然違ひ、今は自由企業、一般教育、眞の民主主義、蒸氣、安價な印刷電信等の時代だからである。

二 科學的探究は實際的目標を助けはするが之に従つて配列すべきでなく、研究題目の性質によつて配列すべきである。

科學的探求の目的は、實際的助けるべき研究の配列によるべきである。

然らば經濟學は先づ第一に知識のために知識を得るを目的とし第二に實際問題に光明を投ずるを目的とする。何等かの研究を始めるに當つては、吾々はその研究が何の用をなすかを豫め細心に考へざるを得ない。併し吾々は直接この實用を眼目として研究方針を定むべきでない。蓋しかくする時は、思索の一々の方向がその時に目指す特定目標に直接の關聯がなくなれば直ちにこの思索方向を中斷したいといふ誘惑が來るからである。實際目標を直接追求する結果は、一切種類の斷片的知識を雜然と類集することになる。その知識はその時の直接目標と關聯するといふ外、互に何等の聯絡もなく、互に他に光明を投ずることも殆んどない。かゝる斷片的知識を次へ次へと漁るは心性的精力の徒費である。何一つ徹底的に考へ抜かれてゐない。眞實の進歩は毫末もない。従つて科學の目的に最も適する編次法は總て本質上互に類似する事實と推理とを一箇所に集めることにある。さすればその各々の研究はそれに近い事實或は推理に光明を投ずるのである。かくして長い間に亘り或る部類の考察を續けて行けば、漸次所謂自然の法則 *Nature's Law* と呼ぶ諸基本的統一性に近づ

く。吾々は先づ最初これら法則の作用を一々について辿り次にその二三の作用の結合せる場合を辿つて見る。かくすれば進歩は遅いが確實である。經濟學者は經濟學的研究の實用を寸時も忘れるべきでない。併し經濟學者獨特の任務は事實を研究し解釋し種々の原因—單獨に作用するもあり結合して作用するもある—の結果を見出すことにある。

三 經濟學的攻究の主要題目。

右を例證するため、經濟學者が當面する主要問題を少しく列舉して見やう。その研究するは—

富の消費・生産と分配・交換・産業・交易の組織・金融市場・卸賣・小賣・外國貿易・雇主對被傭者の關係等に影響を及ぼす原因如何。殊に近代世界に於ては如何。これら一切の運動が相互に作用し反作用する状態如何。その終極傾向と直接傾向との相違如何。

或る物の價格は如何なる制限の下に於てその物の願望性 *desirability* の測度と

經濟學者の
攻究問題

なるか。社會の何れかの階級の富の一定増加の結果として即決的 *prima facie* に何程福祉が増進するか。或る階級の産業能率はその所得の不足によつて如何程迄害されるか。或る階級の所得の増加が一旦事實に現れた以上その結果はその階級の能率と収入力とを増進するが、この所得増加は如何程迄この結果によつて維持されて行くか。

事實の問題として或る場所、或る社會層、或は或る特定産業に於て、經濟自由の影響は如何程迄及ぶか(或は或る特定時に於て如何程迄及んだか)。右の場合に於てその他には如何なる影響が最も有力であるか。又これら一切影響が結合する場合の作用如何。殊に經濟自由はそれ自らの作用によつて如何程迄合同、獨占を形成する傾があるか。又その結果は如何。社會の多様の階級が結局に於て經濟自由の作用を受ける状態如何。經濟自由の終極結果が漸次現れ来る中間には如何なる中間結果が現れるであらうか。又これら結果の及ぶ期間を考慮した上これら終極・中間の二種の結果の相對的重要性如何。或る系統の租税の歸着如何。その租税は社會共同體に何程の負擔となるであらうか、又國家

に何程の歳入を與へるであらうか。

四 現時英吉利經濟學者の探究を促す實際問題。但し必ずしも全部斯學の範圍に屬してはゐない。

以上は經濟科學が直接に取扱はねばならぬ主要問題である。事實を集め之を分析し之について推理するは經濟科學の主なる仕事であるが、この仕事は以上の諸問題に従つて配列すべきである。實際問題は大部分經濟科學の範圍外にあるが、なほ經濟學者の勞作の背後に隠れた主要動機をなすものである。これら實際問題は時により場所によつて異なる。經濟學者の勞作の素材たる經濟事實・經濟状態が時により場所によつて異なるの比ではない。次に掲げる諸問題は現時の英國に於て殊に切迫的であると思ふ――

經濟自由の終極結果とその進行道程との兩者から見て、經濟自由の良影響を増し惡影響を減ずるには如何なる措置をとるべきであるか。假りに終極結果が善利であつて進行道程が有害でありながら、その害惡に苦しむ人々がその良

現時英吉利經濟學者の探究を促す實際問題、但し必ずしも全部斯學の範圍に屬してはゐない。

結果を収めないとする。然らばその人々が他人の福利のために苦しむのは如何なる程度迄正しいのであるか。

假りに今よりも一層平等な富の分配が望ましいものであることを自明視する。然らば例へ富の總體額を減少するに至るとしても、如何なる程度迄財産制度或は自由企業の制限を正當とするか。言ひ換へれば例へ國民的物質富を若干減少するとしても、如何なる程度迄貧民階級の所得を増加しその作業を減少するを期すべきであるか。毫も不正を生ぜず、又進歩の嚮導者の精力を殺ぐことなくして如何なる程度迄之を爲し得るか。社會の種々の階級の間には租税の負擔を如何に分配すべきであるか。

吾々は現存の分業形態をもつて満足してをるべきであるか。多數の人々は向上的性質を持たぬ作業に没頭してゐるが、かゝる事は必要であるか。労働者大衆を教育して漸次高級作業に適する新力量を習得せしめるは可能であるか。特に労働者が企業に雇傭されつゝ、組合的 (co-operatively) に該企業經營の任に當る新力量を習得せしめるは可能であるか。

吾々の文明階段に於て個人行爲と共同行爲との至當な關係如何。目的によつては共同行爲をもつてするを殊に便利とする場合があるが、かゝる場合には如何なる程度迄新舊種々の形態の任意的團體をして共同行爲に任せしむべきであるか。社會自體が帝國政府或は地方政府を通じて營むべき事如何。例へば吾々は空地・藝術品・訓育・娛樂手段の共同所有・共同使用計劃を爲すべき所迄爲し遂げてゐるか。協力行爲によつて支給すべき瓦斯・水道・鐵道の如き文明生活の物質的要件については如何。

政府自ら直接に干渉しない場合には、如何なる程度迄個人・法人の欲する儘な所業を許すべきか。鐵道その他の事業は或る程度迄獨占の地位にあり、又土地その他の物は人力によつて分量を増加し得ないものであるが、政府はかゝるものゝ經營を如何なる程度迄取締るべきであるか。現存財産權を悉くその全幅の威力の儘維持する必要があるか。或は財産權は元來何等かの必要に應ぜんとして生じたものであるが、その必要は幾分消滅したのではないか。

現在行はれる富の使用法を全然正當視する根據があるか。或る種の經濟關

係に於ては嚴格暴虐な政府干渉は害あつて益のないことがあるが、かゝる場合には社會輿論の道德的壓迫は如何なる範圍迄個人行爲を束縛し善導するか。經濟事項について國民相互の義務と同國民中の各人相互の義務とは如何なる點に於て違ふか。

即ち經濟學とは政治的・社會的・私的生活殊に社會生活の經濟部面と經濟狀態との研究を意味すると解すべきである。その研究の目標は知識のために知識を得ることであり、又生活上殊に社會生活上の實際的處置の中に指針を得ることにある。今日の如くかゝる指針の必要を急とすることは未だ曾てなかつた。後の學者の時代に至らば或は吾々以上に時間の餘裕が出来るかも知れぬ。さうなれば現在當面の困難に直接の補助手段たらざる研究、即ち抽象的思索の上或は過去の歴史の上に於ける不鮮明點に光明を投ずるのみで當面の困難には直接の助力を與へぬ探究に没頭する時が来るかも知れない。

かくの如く經濟學は實際的の必要によつて著しく進路を動かされる。併し經濟學は能ふ限り政黨組織の緊急事項及び對内對外政治上の外交政略の如きを

現代經濟學の重要目標は社會問題の解決にある

論ずることを避ける。政治家は自己のために到達點を確保せんと欲し、その提案し得る諸手段中の何れが最も近くこの到達點に近づくかを決定するのであつて、政治家は右の事柄を考慮せざるを得ない。政治家は何をもつてこの到達點とすべきかを決し、又この到達點のためにする一般政策上の最善方法如何を決定する。經濟學は實にかゝる場合に政治家の助けとなることを期してゐる。併し經濟學は實際家の見逃し得ない幾多の政治問題を避ける。従つて一個の科學—純粹と應用と—たるものであつて科學にして且つ術たるものではない。よつて『政治的經濟學』 Political Economy と狭く用語よりは『經濟學』 Economics と広く廣く用語の方がよく言ひ表してゐる。

五 經濟學者は知覺・想像・理性・同情の才幹を訓練する要がある。

經濟學者は三つの重大な知性的才幹を要する。知覺・想像・理性これである。分けても最も肝要なのは想像である。目に觸れる事件の遠い原因或は表面に

經濟學上に於ける知性・想像・理性の機能

現れぬ原因を探り、目に觸れる原因の遠い結果或は表面に現れぬ結果を探り得るはこの想像によるのである。

之を鍛錬する上に於て自然科学殊にその中の物理的分科は人間行爲に關する一切研究よりも優れた大長所を持つてゐる。物理的分科の攻究者は後の觀測或は實驗によつて檢證し得る精密な結論を求むべきだからである。若し攻究者が表面に現れてゐる原因結果をもつて足れりとするならば、その誤は直ちに發見される。或は攻究者が自然諸力の交互作用を無視し、各々の運動がその周圍の一切を變形し又之によつて變形せしめられる關係を無視するならば、その誤は直ちに發見される。又徹底的な物理學者は決して單なる一般分析のみをもつて満足するものではない。この分析を數量的分析たらしめ、それぞれ割合に應じて之を彼の攻究問題中の各分子に割當てやうとする努力を斷たないものである。

經濟學者も或る程度迄は外面的標準によつて

人に関する科學に於てはかく迄精密性を期することは出來ぬ。最小抵抗の路は時とすると既に開かれてゐる唯一の路たることがある。この路は常に人

を魅惑する。同時にこの路は常に人を欺くのであるが、それにも拘らずこの路を進まうとする誘惑が強い。不撓不屈の研究によつて萬難を排して行けば一層完全なる大道路を開き得る場合に於てさへなほ且つさうである。

歴史の科學的研究者には實驗が出來ないといふ障害がある。又輕重の度を評定しても之を照し合せる客觀的標準の缺如といふ一層の障害がある。歴史家の論程は殆んどその論程の一段毎にかゝる評定を隠してゐる。諸原因の相對的輕重を隱約の裡に評定せずしては、甲或は甲類の原因が乙或は乙類の原因よりも弱かつたとは結論し得ない筈である。之とても自身の主觀的印象に依存する所が多いのであるが、餘程の努力をもつてしなければそれさへも認め得ないのである。經濟學者も亦たこの困難の障害を受ける。併しその程度は人間行爲の他の研究者程ではない。蓋し經濟學者は實に物理學者の研究に精確性と客觀性とを與へる長所を幾分持つてゐるからである。兎も角も經濟學者が現時及び最近時の事件を問題とする限りに於ては、その取扱ふ事實は多く自ら種別を異にする。この類別された事實について敘述を爲し得る。この敘述

は明確であつて往々数字的精確に近いものもある。經濟學者は表面に現れずして容易に目に觸れない原因・結果を求め、複雑な諸條件をその分子に分析し幾多の分子を集めて再び一の全體を再構成するのであるが、之に當つて彼が幾分の長所を有するは即ち右の理由によるのである。

元より些細の事項に於ては單純な經驗も見えざるものを暗示するであらう。例へば節約心なき者に無思慮の補助を與へるとする。この場合に表面に現れる所は殆んど無害有益のやうであるが、實は性格の強固性を毒し家族生活を害するは單純な經驗をもつてしても觀破し難くないであらう。併し例へば雇傭の安固を増進しやうといふ幾多の尤もらしい方案がある。その場合に、その方案の眞正結果を探るには、一層の努力を要し、視野の一層廣大なるを要し、想像を一想強く働かしめるを要する。この目的のためには信用・國內商業・外國貿易競争・農作物價等に起る變動が如何に密接に相關聯してゐるか、又如何にこれらの一切が善くも悪くも雇傭の安固を左右するかを知つておく必要がある。西洋諸國の一部に著しい經濟事件が起れば、殆んどその一々は殆んど一切の他の部

併し經濟學
者の主とし
てよる所は
規律ある想
像でなければ
ならぬ

分の――少なくとも――若干生産業に於ける雇傭を如何に左右するかに注目する必要がある。若し吾々が手近な失職原因のみを取扱ふならば、現に吾々の見てゐる害惡を適切に救濟せぬであらうし、吾々の見てをらぬ害惡を來すであらう。若し吾々が遠く離れてゐる原因を探つてその輕重を比較すべきものとすれば、吾々の當面の研究は即ち精神の高級訓練となるのである。

更に『標準規約』 standard rule 或はその他何等かの方案によつて何れかの生産業の賃銀が殊に高められてゐる場合がある。かゝる場合には人が支拂はんと欲する價格に甘んじてその作業を營む力量を持つ人々があつても、この標準規約に妨げられて作業し得ないことになる。即ち想像を働かしてかゝる人々の生活を辿るのである。彼等の地位は引上げられたのか引下げられたのか。通常は一部が引上げられて一部が引下げられるのであるが、多數が引上げられて少數が引下げられたのであるか。或はその反對であるか。若し表面の結果に著眼するならば、或は多數が引上げられたと推定するかも知れない。併し種々の禁壓・労働組合の權威によるとその他によるとを問はぬ――があつて、これ

がために人はその最善を爲しその最善を收得し得ないのである。若し吾々が想像を科學的に用ひて、その妨害の状態を悉く考へ抜くならば、往々引下げられたのが多数であつて引上げられたのは少数であるとの結論に達することがあらう。オーストラレーシア殖民地の一部は—幾分英蘭の影響もあり—大膽な冒險を試みつゝあつて、その冒險は労働者の即座の快適と安易とを増加し前途甚だ有望の如くである。實にオーストラレーシアの廣大な土地はその起債力の一大準備資金である。右の提案による近道を行く結果が若干の産業衰退となつても、その衰微は輕微であり一時的であるかも知れぬ。併し英蘭も同様の道を歩むべきであるとの主張が既に起つてゐる。英蘭の場合にはこの衰微は一層重大であらう。之と同種のかゝる案は之を一層廣く研究する要がある。天候險惡時の戰艦の安定性に關する考案が生ずれば、吾々は非常に細心慎重に之を判斷する。同様の精神をもつて右の如き案を研究する要がある。又近い將來に於てかゝる細心の廣い研究の起るを希望するは必ずしも早計ではない。かくの如き問題に於て最も用の多いのは純知性的才幹である。否時として

又熱烈な同

情を要する

は批判的才幹である。併し經濟學的研究は同情の才幹を要求し發達せしめる。殊に同階級の同志者の身になるのみでなく他階級の人の身にもなり得る如き非凡の同情を要求し發達せしめる。この階級的同情は或る種の探究によつて強く發達する。例へば性格と所得、雇傭方法と支出上の習性とが互に及ぼす交互影響の探究の如きである。各經濟集合體—家族、同一企業内の雇主被傭者、同一國内の公民—の體員を結束せしめる信念と愛著とが、一國民の能率を高め又之によつて高まる所以の探究の如きである。自由職業者格式と労働組合慣習には個人的沒我と階級的利己とがあるが、その中に混在する善利と害惡との探究の如きもそれである。又増加しつゝある吾々の富と機會とを當代と次代との福祉のために最もよく利用せんとする運動の探究の如きもそれである。これらの探究は總て日毎に切迫を加へつゝあるものである(1)。

(1) この項は次の一篇から再出した。 *Plea for the creation of a curriculum in economics and associated branches of political science.* 之は一九〇二年ケムブリッジ大學に建議して翌年容れられたものである。

吾々の理想の社会を實現するに必要とするものは、愈々確たる心算を以て之を認むるべきである。

經濟學者は殊に自己の理想を開展するために想像を要する。併しその理想の唱道が先に立つてその將來の把握が之に及ばなくなる如きことなからしめるには、分けも細心の用意と慎重とを要する。

今後數代を経て顧みれば、吾々現在の理想と方法とは人間の成熟期に屬せずしてその幼年期に屬するものと看做されるに至るかも知れぬ。明確な一前進は既に遂げられた。吾々は各人が一絶望的に病弱或は不良となる迄は—全幅の經濟自由に價することを學んだ。併し吾々はかくの如くして始まつた前進が抑々終極に於て如何なる到達點に向ふものであるかを確信をもつて推測する域に達してゐない。一切人間性を抱擁するものと見る産業有機體についての研究は粗雑ながらも中世後期に始まつた。それ以來逐次の時代はこの有機體の成長を目撃した。併し如何なる時代と雖も吾々の時代の如く大なる成長に會した時代はない。該有機體研究の熱烈さも有機體の成長と共に増大し來

つた。この有機體を理解するために行はれた努力は廣大多様であつて、之に並ぶものは如何なる前の時代にも求め得ないのである。併し最近時の研究の主要な成果として、吾々は吾々以前の如何なる時代が認め得たよりも以上に、次の點を痛切に認めるに至つた。それは即ち進歩を成型する諸原因について吾々の知る所が如何に貧弱であるか、又産業有機體の終極の命數について吾々の豫測し得る所が如何に少ないかといふことである。

十九世紀初頭、一部の冷酷な雇主及び政治家は、排他的階級特權を擁護した關係上、彼等の階級のために經濟學の權威を借りるを便とし、往々『經濟學』と自稱した。吾々自身の時代に至つてすら、社會大衆教育のための多額の經費に反對する者は潜越にもかく自稱した。現存經濟學者は異口同音にかゝる支出が眞の經濟なるを主張し、之を拒むは國民的見地から見て誤れると同時に拙劣なるを主張しゐるのであるが、彼等はこの事實に拘りなきものゝ如くである。併しカーライルとラスキンとは、少しも検討することなくして、彼が眞實睡棄した言動の責は一に繋つて諸大經濟學者にありとし、その他この二人程の輝かし

近代經濟學の性質を、格別に關する。

い高貴な詩想を持たぬ多くの作家も之に追隨した。その結果これら大經濟學者の思想・性格についての通俗の誤解が起つて來た。

事實はかうである。近代經濟學の建設者は殆んど總て溫雅・同情的の氣質を持ち之に人間性の情熱を合せて持つてゐた。彼等は自家の富に殆んど無頓着であつた。彼等は之を社會大衆の間に廣く散布することに心懸けた。彼等は反社會的獨占に對してその如何に強力な場合にも反對した。階級立法は雇主團結に許した特權を勞働組合に拒否したが、彼等は數代に亘つてかゝる立法に對する反抗運動を支持した。或は舊救貧法。Poor Lawは農業勞働者その他の勞働者の心臓と家庭とに毒素を注入しつゝあつたが、彼等はこの毒素に對する救濟策を講じた。或は彼等は經濟學者の名を潜稱した一部の政治家・雇主の猛烈な反對をも排して決然工場法を支持した。彼等は全民衆の福祉は一切私人努力及び一切公共政策の終極目標たるべしとの教義に全生命を投じて一人の例外もない。併し彼等は勇氣と細心とに強かつた。彼等は外見冷淡であつた。何となれば彼等は未踏の道を行く急速な前進を唱道する責任を負はぬからで

ある。かゝる道の安全はたゞ熱烈な想像を持つ人々の斷乎たる希望によつて保障されるに過ぎない。かゝる人々の想像は熱烈ではあるが、その想像は知識による健實味を缺き苦しい思索による鍛鍊を缺いてゐる。

生物學は人類の將來を與へた

彼等の細心は恐らく必要以上に聊か過ぎてゐた。蓋しその時代の大觀察者の視野と雖も或る點に於ては現代の最も教育ある人々の視野に比しては狭かつたからである。現代は即ち――には生物學的研究の暗示をも受けて――性格成型上に於ける境遇の影響が社會科學に於ける最重大事實として一般に認められるに至つた時代である。従つて經濟學者は今や人間進歩の可能性について一層廣大な一層希望に満ちた視點をとることを學んだ。彼等は人間の意志が――細心の思索に指導されつゝ――境遇を變形し、もつて著しく性格を變形し得ることに信頼を置くことを學んだ。かくて性格に一層好適な新生活條件、従つて大衆の經濟的福祉並びに道德的福祉に一層好適な新生活條件を作り出すことを學んだのである。この大目標に至る道には尤もらしく思はれて而かも精力と自發性との泉を涸らし盡す捷徑があるが、かくの如き一切捷徑に反對する

併し捷徑は
危険なるは
依然あると
眞は細心且
歩は細心的
なつて進む
らねばなら
ぬ

は即ち今日—如何なる時に於けるとも同じく—經濟學者の義務である。
經經科學を建設した偉大な人々は在るが儘の財産權を尊奉しなかつた。併
し既得權利を振つて之を極端に反社會的に用ひた一部の人は、不當にも斯學
の權威を借りた。従つて次の點を舉示しておきたい。即ち細心の經濟學的研
究の傾向は私有財産權の根據を如何なる抽象原理の上にも置かずして、過去に
於ては健全な進歩と分離すべからざるものであつたとの觀察の上に置くとい
ふ點である。又従つて社會生活の理想的條件に不適當なるかの觀ある諸權利
と雖もその撤廢或は改正に當つては細心且つ試驗的に進むこそ責任感ある人
々の任務であるといふ點である。

第二編 若干基本概念

第二編 若干基本概念

第一章 開題

一 經濟學は富をもつて欲望を満すものであり努力の結果であるとする。

經濟學は富をもつて欲望を満すものであり努力の結果であるとする。

既に明かにした通り、經濟學は一面に於て富の科學であり他面に於て社會に於ける人間行爲の社會科學の一部である。その一部とは人間欲望を満すがための人間努力を取扱ふ部分でありその努力と欲望とを富によつて或は富の一般代表者即ち貨幣によつて測定し得る限りに於て取扱ふ部分である。吾々は本書の大部分に於てこれらの欲望と努力とを研究し、欲望を測定する價格と努力を測定する價格とを均衡状態に齎す諸原因を研究するであらう。この目的のために吾々は第三編に富と富によつて満さるべき人間欲望の雑多性との關

係を研究し、第四編に富と富を生産する人間努力の雑多性との關係を研究するであらう。

併し先づ富
自體の豫備
に研究を行
ふ如かぬ

併し本編に於ては、人間努力の結果であり且つ人間欲望を満し得る一切物中の何れをもつて富と見るべきか、又これらの物を如何なる部類或は種類に分類すべきかを究めねばならぬ。蓋し富そのものと資本とに關聯ある用語は總て一密集部類を成してゐるからである。その用語の各々を研究すれば他の用語も明かとなる。之に對してこれらの用語を全體として研究すれば、前編に行つた經濟學の範圍及び方法についての探究の直接連続であり或る點に於てその完結である。従つて直ちに茲に右の部類の用語を取扱ふのが大體に於て最もいい。欲望と欲望に直接關係する富との分析から出立するは之よりも自然的の徑路であるが、今はこの徑路をとらぬ。

之を行ふには勿論欲望と努力との多様性を幾分考慮すべきであらう。併し吾々は明白ならざる何物をも又共通知識に屬せぬ何事をも假定するを欲せぬであらう。吾々の仕事の眞實の困難は反つて他の方向にある。之は諸科學中

にあつて獨り經濟學のみが常用の少數用語によつて多數の微妙な區別を言ひ表す苦しい必要の結果である。

二 性質用途を變ずる物を分類する困難。

分類の諸原

ミルは言ふ(1)「科學的分類の目的を最も良く達するは次の場合である。即ち同一物は種々に部類分けし得るが、如何なる他の部類分けによるよりも多數の一般命題を立つるを得且つその命題が一層重要である如く、對象を部類分けする場合である。併し既に出立點に於て困難がある。それは即ち甲の經濟發展階段に於て最重要の諸命題は例へ依然乙階段に適用ありとしても、動もすると最も重要性の少ない命題となり勝ちなことこれである。

(1) Mill, Logic, Bk. IV, ch. VII, Par. 2.

性質用途を
變ずる物を
分類する困

この點に於て經濟學者は生物學近時の經驗に學ぶべき所が多い。右の問題に關するダーウインの深遠な論究(2)は吾々當面の困難に強い光明を投ずる。彼の指摘する所によれば、各生物の構造部分中には、その生物の生活習性を決定

しその生物が自然の經濟中に占める一般地位を決定する構造部分があるが、この部分は原則としてその生物の起源に最大の光明を投ずるものに非ずして反つて最小の光明を投ずるに過ぎぬものである。畜産家或は園藝家は一動物或は一植物の若干素質がその動植物をして環境内に繁榮し得せしむるに殊に好適であると認めることがある。かゝる素質は右の理由があるが故にこそ反つて恐らく比較的近時に發達したものであらう。之と同様に、或る經濟制度の屬性中にはこの制度をしてその今日に於ける任務に適せしめる上に最も重要な役目を勤めるものがある。かゝる屬性は右の理由があるが故にこそ反つて恐らく大部分近時に發生したものであらう。

(C) Darwin, Origin of Species, ch. XIV.

その例は雇主對被傭者の關係、仲立人對生産者の關係、銀行とその二種の顧客即ちその債務者・債権者との關係に之を見る。「ウズラ」usury といふ用語を棄て、「^{インテレスト}利子」interest といふ用語を代用するに至つたのは、貸附の性質に起つた一般的變化に相應する。この一般的變化の結果、貨物の生産費を分解した各種分

子の分析と分類とは全然新しい基調を得るに至つた。更に労働を熟練労働・不熟練労働に分つ一般考案も漸次變化しつゝある。「地代」rent といふ用語の範圍も若干方向に向つては擴大され若干方向に向つては限局されつゝある。その他なほ例は多い。

併し他面に於て吾々の用ふる用語の歴史を常に念頭におかねばならぬ。蓋し先づ第一に、この歴史は歴史なるが故に重要だからである。何となればこの歴史は社會の經濟發展史に側面光を投ずるからである。なほ又例へ吾々の經濟學研究の唯一の目的が、目前の實際的目的の達成を指導する知識を得るにありとしても、なほ且つ用語の用法を能ふ限り過去の傳統に調和せしむべきである。之は吾々祖先の經驗が吾々への教訓として提供する間接の示唆と微妙な隠れた警告とを迅速に觀破せんためである。

三 經濟學は日常生活の實際に従はねばならぬ。

吾々の任務は難い。物理學に於ては、一部類の物が一類の共通性質を有し且

ついでには
日常生活に
生ずるは
常に必要
ならぬ

つこれらの物を屢々一括して呼ぶことが分れば、その場合には必ずこれらの物は一種類とされて特殊の名稱が與へられ、一新觀念が生じ來れば之を言ひ表す新術語が發明される。併し經濟學はこの例に倣ふ冒險を敢てし得ない。その推理は一般公衆に通ずる言語をもつて言ひ表さねばならぬ。従つて經濟學は日常生活の卑近の用語に従ふことを努めねばならず、能ふ限り通常の用法に従つてこの用語を用ひねばならぬ。

併しその用
法は必ずし
も常に一貫
せぬ

通常の用法に於ては殆んど總ての言葉には意味の濃淡があり、従つて文脈によつて之を解釋する要がある。而してバヂオット Bagehot の指摘した通り、經濟科學上の最も形式的な著述家と雖も己むなくこの方針に従はざるを得ない。然らざれば彼等の使用し得る言葉が不足するからである。併し不幸にして彼等はこの自由を敢てしつゝある旨を明言しない。恐らく時にはこの事實自體を殆んど自識せぬことさへある。彼等の斯學の解明は大膽な固定的定義をもつて始まるが、かゝる定義は讀者を眩まして誤つた安全の感を與へる。讀者自ら往々文脈中に特殊の解釋句を求むべしとの警告が與へてないため讀者は之

を讀んで筆者の本意に非ざる意味を與へ、恐らく之を誤り傳へ、筆者の責に非ざる不明を責めるのである(3)。

(3)『日常生活に於ては文脈が一種の表現なき「解釋句」となつてゐるが、吾々は「日常生活に於けるよりも一層明細に書くべきである。』たゞ經濟學に於ては日常談話に於けるよりも一層困難な事項を論ずるから、吾々は一層用意を周到にし、少しでも變化があれば一層の警告を與へねばならぬ。時には誤謬を避けるためにその頁或はその論證の「解釋句」を書き表さねばならぬ。私はこの事の困難微妙なるを知つてゐる。この事を可とするについて私の言はんとする所は、實行上に於て固定不動の定義を用ふる他の考案よりは安全であるといふ一事に盡きる。何人でも意義の固定した僅少の語數をもつて複雑な事物に關する多様の意味を表さうと試みる者は、その筆致が煩雜となるのみで少しも精確とはならぬことを知るであらう。又卑近の思想を表すに冗長な迂回的説明を用ひねばならず、結局目的を達せぬことを知るであらう。蓋し彼は殆んど常にその場合々々に適する意味に逆轉し、その意味も甲か乙か一定せず、殆んど常にその「固定不動」の意味に背馳するからである。かゝる論究に於ては吾々は欲する儘に定義を變化せしめることを學ぶべきである。恰かも問題の異なるに従つて「xyz」の表す意味を異ならしめる如くである。これ即ち最も頭腦の明晰な最も業績を擧げた著述家が、例へ常に之を明言せずとも、實質に於ては實行しつゝある所である』。Bagehot, Postulates of English Political Economy, pp. 78, 9. ケアマンズ Outlines,

Logical Method of Political Economy, Lect. VI. も亦た『定義の基礎たる屬性は度差を許さざる底のものでなければならぬとの説』を攻撃し、『度差を許すは一切自然事實の性質である』と論じてゐる。

又明確でもない

更に經濟學上の言葉が言ひ表す主要區別は多く種類の差に非ずして度差である。一見した所これらの區別は種類の差のやうに見え明白に劃し得る鋭い輪廓を持つてゐるやうである。併し一層細心の研究は連續性の實質的切斷のないことを示した。經濟學の進歩が新しい實質的な種類の差を殆んど發見せず、他面に斯學の進歩が外見上の種類の差を絶えず度差に分解しつゝあるは著しい事實である。太い固定不動の分界線を引き、自然が少しもかゝる分界線を引いてゐない事物の差異について確定的な命題を立てんと企圖するは有害である。吾々はその多くの事例に接するであらう。

四 概念は明快に定義する必要があるが用語を固定的に用ひねばならぬ必要はない。

概念は明快に定義する必要があるが用語を固定的に用ひねばならぬ必要はない

然らば吾々は吾々の取扱ふべき多様の事物の實質的特色を細心に分析せねばならぬ。之によつて一般に吾々は各用語の用法中に明かに他の用法に立ち勝る主たる用法たるべきものゝあるを知るであらう。之を主たる用法とする根據は、この用法が日常の用例に調和する他の何れの用法よりも近代科學の目的のために一層重要な區別を言ひ表す所にある。反對の明言のない場合或は反對の意が文脈中に含まれてゐない場合には、必ず之をもつてその用語に與ふべき意味であると定めていゝ。この用語をこれ以外の意味——一層廣い意味なると一層狭い意味なるとを問はぬ——に用ひんと欲する場合には、意味の變更を指示しておかねばならぬ。

定義の分界線の——少なくとも——若干を引くべき精密な點如何については、最も細心な思想家の間にさへ常に意見の相違が残存するであらう。茲に論ずる問題は一 generally 各種道程の實際的便宜如何の判斷によつて解決せねばならぬ。かかる判斷は常に必ずしも科學的推理によつて確證し或は克服し得ない。必ず討論の餘地が残らざるを得ない。併し分析自體にはかゝる餘地はない。若し

二人の人が之について意見を異にするならば、兩者とも正しいといふことはあり得ない。又斯學の進歩は漸次この分析を不動の基礎の上に確立するものと期待していい。(4)。

(4) 一用語の意味を狭めんと欲する場合(即ち論理學の言葉を借りて言へばその内包を増して外延を減せんとする場合)には、一般に限定形容詞で十分であらう。併しその反對の場合には原則としてかくの如く單純に變更し得ない。定義に關する論争は往々次のやうな種類のものに過ぎぬ——即ちAとBとは多數の物に共通な性質であつて、これらの物の多くはその外にCといふ性質を有し、更にその多くはDといふ性質を有し、之に對してその若干はCとDとの兩性質を有する。然らば大體に於て一用語を定義するにはAとBとの性質を有する一切物を包括せしめるを最善とするとか、或はABCの性質を有する物のみを包括せしめ、或はABDの性質を有する物のみを包括せしめ、或はABCDの性質を有する物のみを包括せしめるを最善とするとか、如何様に論じてもいい。これら多様の方針中の何れを採るか、の決定は實際的便宜の考察によつて決せねばならぬ。ABCDの諸性質及びその相互關係の細心の研究に比すれば遙かに重要でない。併し不幸にして英吉利經濟學に於ては定義についての論争の多きに比してかゝる研究は遙かに少なかつた。定義についての論争とても元より時には間接に科學的眞理の發見へ導いたこともあるが、それは

常に迂回の途をとり時間と勞力とを空費すること多かつたのである。

第二章 富

一 財といふ用語の學術的用法。物質財。人財。外界財と内界財。可讓財と不可讓財。自由財。交換し得る財。

富は望ましい物即ち財から成る

一切の富 wealth は望ましい物 desirable things から成る。即ち直接或は間接に人間欲望を満す物から成る。併し望ましい物が悉く富として數へられるのではない。例へば友情は福祉の一重要分子であるが、詩の上の破格用法による場合の外之を富として數へない。よつて先づ初めに望ましい物を分類し、次にその中の何れを富の分子に數ふべきかを考察しやう。

一切の望ましい物即ち人間欲望を満す物を言ひ表す常用の簡単な用語がないから、この目的のために財 Goods といふ用語を用ひたい。

望ましい物即ち財には物質財 Material goods と人的非物質財 Personal and Imma-

物質財

欠

欠

商人は利用
を生産する

を適用し或は引き去り得るのみである。その餘は自然が内部的に營む(Banner, Philosophy and Political Economy, p. 249 の引用文) (譯者—Francis Lord Verulam の英譯による)。

人の時に言ふ所によると、商人は生産せず、又指物師は家具を生産するが家具商は既に生産された物を單に賣るに過ぎない。併しこの區別には何等の科學的根據もない。兩者何れも利用を生産し、兩者の何れもそれ以上を爲し得ない。家具商は物質を移動し置換してその奉仕性を以前よりも大ならしめる。大工もこれ以上を爲し得ない。地表で石炭を運搬する船員、鐵道従業員が石炭を生産すること、恰かも地表下で之を運搬する鑛夫が之を生産すると同じである。魚屋は魚類の比較的有用ならざる所から比較的有用な所へ魚類を移すことに助力する。漁夫もこれ以上を爲すものではない。商人が往々必要以上に多數なること、及びこの場合に必ず空費の存するは眞である。併し一人で十分取扱ひ得る犂一個に對して二人の人がある場合にも亦た空費がある。何れの場合にも苟くも作業に當る者は例へ極く僅かしか生産せぬとしても、兎も角悉く生産する。一部の學者は、商業は生産せずとの根據に立つて中世的の商業攻撃を

復活せしめた。併し彼等はその標的を誤つた。彼等は商業組織殊に小賣商業組織の不完全を攻めるべきであつた(2)。

(2) 狭義の生産は生産物の形態・本質を變化せしめる。商業・運送はその外部關係を變化せしめる。

消費、consumption は負の生産と見てい、恰かも人が單に利用を生産し得るのみなると同じく人はそれ以上を消費し得ない。人は奉仕その他の非物質的生産物を生産し之を消費し得る。併し物質的生産物の生産は實は物質の置換―この置換は物質に新利用を與へる―に過ぎぬ。同様に物質的生産物の消費は物質の解體―この解體は物質の利用を減少し或は滅却する―に過ぎぬ。元より人が物を消費すると言ふ場合にも、人はその物を自己使用のために保有するに止まることが往々ある。他方シーニオルの言つた通り、「これらの物は多數の漸進的營力によつて破壊され、吾々はこの營力を總括して時と稱する」(3)。小麥の『生産者』とは自然が種子を成長せしめる場所に種子を播く者である。同様に繪畫・カーテン、否住宅或はヨットの『消費者』は自らこれらを消耗せし

人は單に利
用を生産し
得るのみな
ると同じく
利用を消費
し得るのみ
である

めること殆んどなく、彼はこれらを使用するのみで時がこれらを消耗せしめるのである。

(3) Senior, Political Economy, p. 54. シーニオルは『消費する』to consume といふ動詞に代へて『使用する』to use といふ動詞を用ひたいのである。

右の外になほ一の區別がある。この區別はやゝ重視されてゐたが曖昧であつて恐らく實用は多くない。それは一方に食衣その他の如く、直接に欲望を満足す消費者財 consumer's goods (消費財 consumption goods) とも或は更に一次財 goods of the first order とも稱せられてゐる(と、他方に於て犁・織機・原綿等の如く右第一種の財の生産に寄與して、間接に欲望を満足す生産者財 producer's goods (生産財 production goods) とも或は更に要具財 instrumental goods とも或は更に中間財 intermediate goods とも稱せられてゐる)との區別である(4)。

(4) 即ち一部の學者は菓子を作るべき小麥粉が既に消費者の家にあれば消費者財とし、之に反して菓子屋の手にあれば小麥粉のみならず菓子自體迄も生産者財としてゐる。カール・メンガー Carl Menger, Volkswirtschaftslehre, ch. I, §2 はパンは一次財、小麥粉は

消費者財と
生産者財

彼自ら指摘してゐる。多くの人は、作業から生ずる直接快樂のみを念とする場合よりも多く作業する。併し健全な状態に於ては雇使されてする作業の大部分に於てさへ快樂は苦痛よりも大である。勿論右の定義は彈力的である。夕方自己の農園に作業する農業労働者は主として自己の労働の果實を思ふ。一日の坐業的作業苦を終へて歸宅する機械工はその農園作業を積極的快樂とするが、彼も亦た自己の労働の果實を大いに思ふのである。之に反して同様に作業する富者は作業の優秀を誇りとするにはあるが、之によつて收める金銭的節約の如きは恐らく殆んど意に介せぬであらう。

(6) 即ちマーカントイリスト Mercantilists は一には貴金屬が不減質であるとの理由によつて、貴金屬をその以外の如何なる物よりも完全な意味に於ての富であると見たから、金・銀と交換する輸出財の生産を目指さぬ一切労働を不生産的 unproductive 即ち『字ま』sterileものと見た。フイジオクラット Physiocrats は生産される價值に等しい價值を消費する一切労働を孕まぬものと考へ、農業家を唯一の生産的作業者と見た。何となれば彼の労働のみが(彼等の考へた所によれば)集蓄富といふ純餘剰を残すからである。アダム・スミスはフイジオクラットの定義を緩和したが、なほ農業労働はその以外の如何なる労働よりも生産的であると考へた。彼の追隨者はこの區別を棄てた。併しこれらの追隨者は、細目點に於ける幾多の小異はあつても、なほ生産的労働とは蓄積富を増加する労働であるとの觀念を固守した。この觀念は諸國民の

召使の作業は必ずしも不生産的ではない

富『The Wealth of Nations』の『資本蓄積或は生産的・不生産的労働について』といふ題下の有名な章の中に、明言されてはゐないが意味として含まれてゐる觀念である。(Tavernier, *Progress of Political Economy*, Sect. VI. 及び J. S. Mill, *Essays* 及び *Principles of Political Economy* 中の『生産的』といふ言葉についての論究を参照)。

例へば近時に至つてさへ多くの學者は依然アダム・スミスの分類法を固守して、召使を不生産的労働の中に分類してゐる。疑もなく多くの大家庭には召使が過剰である。これら召使の精力の一部を他の用途に移せば社會共同體の利益となるかも知れぬ。併しウイスキー醸造によつて生計資料を得る者の大部分についても亦た同様である。然るに彼等を不生産的なりとした經濟學者は一人もなかつた。一家族のためにパンを製するパン焼の作業と馬鈴薯を煮るコックの作業とは性質上少しも區別はない。若しパン焼が製菓商或は上等パン屋ならば彼が不必要の享樂を準備するといふ通俗の意味に於ての不生産的労働に少なくも家庭コックと同じ時間を費すことも有り得るのである。吾々が生産的といふ言葉を單獨に用ふる場合には必ず生産手段及び耐久的享樂源泉について生産的であるとの意味に解すべきである。併し之は紛ら

生産的の暫定的定義

しい用語であるから精確を要する場合には用ひてはならぬ(7)。

(7) 生産手段中には労働必需品 *necessaries of labour* を含んでゐるが、短命の奢侈品を含まぬ。即ち氷菓製作者は、菓子製造業者のために作業するとも田舎の邸宅の召使として作業するとも不生産的と分類する。之に反して劇場建築に従事する煉瓦積工は生産的と分類する。疑もなく享樂の永續的源泉と短命の源泉との區別は曖昧であつて本質的ではない。併しこの困難は事の性質上に存するのであつて、如何に言葉工夫しても完全に避け得るものではない。吾々は身長五呎九吋以上の人を悉く身長高き部類に入れるべきか或は五呎十吋以上の人のみを入れるべきかを決せずとも、身長低き人に比して相對的に身長高き人が増加すると言ひ得る。又生産的労働と不生産的労働との間に固定的な従つて恣意的な分界線を引かずとも、生産的労働が不生産的労働を壓倒して増加すると言ひ得るのである。若し何等かの特定目的のためにかゝる人為的分界線を要するならば、その場合毎に明言してこの分界線を引かねばならぬ。併し事實に於てかゝる場合は殆んど或は全然起らぬ。

若し之を違つた意味に用ひやうと欲するならば之を明言せねばならぬ。例へば労働は必需品その他について生産的であると言つていゝ。

生産的消費

productive consumption は一學術語として用ひられてゐる場合には

富の新生産のためにする富の使用と定義するを通常とする。それは本來は

生産的作業者の一切消費を含むものではなく、彼等の能率に必要な消費のみを含むべきである。この用語は恐らく物質富の蓄積に關する研究には有用なこともある。併し誤謬に導き易い。蓋し消費は生産の終極であり、一切の健全な消費は福利を生産するものであつて、その福利中の最も貴重なもの、多くは物質富の生産に直接寄與せぬからである(8)。

(8) 生産的といふ言葉は種々の區別に用ひられるが、これら一切の區別は甚だ薄弱であつてやゝ架空的である。今日これらの區別を導入するは殆んど無益であらう。併しこれらの區別は長い歴史を持つてゐるから、恐らく之を急激に撤廢せずして漸次廢用に歸せしめるに如かぬ。

凡そ自然が毫も眞實の非連續性を示してをらぬ場合に固定不動の分界線を引かうとする企ては有害である。この生産的といふ用語に時々與へられた固定的定義は必ずしも最有害ではないが、恐らく最も奇妙な結果を導いたのである。かゝる定義の若干は次の如き結論を生じた。例へばオペラの歌手は不生産的であり、オペラ入場券印刷者は生産的であり、之に對して觀客案内者は偶々プログラムを賣らない限り不生産的であつて之を賣れば生産的であるといふ類である。シューニオルはかう指摘してゐる—「コックは炙肉を作る、*make* とは言はず調理、*dress* するといふ。之

に反して彼はプディングを作る、と言ふ。服屋は布地を服に作る、と言ふが染物屋は白地を色布に作る、と言はぬ。染物屋が起した變化は恐らく服屋が起した變化よりも大であるが、服屋の手を通る布地は名を改め染物屋の手を通つては名を改めない。染物屋は新しい名を生産せずその結果として新しい物を生産しなかつたのである』(Pol. Econ. pp. 51, 2)。

三 生存必需品と能率必需品。

茲に於て吾々は必需品といふ用語を考察することとなる。通常必需品 necessities・快適品 comforts・奢侈品 luxuries を區別する。右の第一は満足を得ぬ欲望を満足一切物を包括し、之に對して後者はこれ程に切迫的性質を有せぬ欲望を満足物から成る。併し茲にも亦た多義の煩はしがある。吾々が或る欲望は満足を得ぬと言ふ場合に、若しその欲望が満足されないとすれば吾々は如何なる結果を眼中においてゐるか。その結果は死を含むものであるか。或は活力・強固性の損失のみを言ふか。言ひ換へれば必需品とは生活必需品 necessary for life なのであるか或は能率必需品 necessary for efficiency なのであるか。

必需品とは満足を得ぬ欲望を満足する物である併しこの言は多義である

必需品といふ用語は省略して用ひられて來る言葉である

必需品といふ用語は生産的といふ用語と同様、意義を省略して用ひられて來た。その用語の意味に含む主格は讀者自ら補ふべきものとされてゐた。その意味に含む主格は同じではなかつたから、讀者は往々筆者の本意に非ざる主格を補つてその論旨を誤解した。その場合にも—前の場合と同様—紛らはしい重要箇所には一々讀者の正しく解すべき意味を補へば、混同の主要源泉を除去し得るのである。

舊式な用法によれば必需品といふ用語は労働が—平均上—自身と家族とを維持し得るに足る物に限定されてゐた。元よりアダム・スミス及びその追隨者中最も細心な人々は、快適及び『高雅』の程度 standard of comforts and "decencies" の多様性を觀破してゐた。彼等は氣候の差異と慣習の差異とによつて或る場合の必需品が他の場合の過剰品となるを認めてゐた(9)。併しアダム・スミスはフイジオクラットの推理の影響を受けてゐた。同派の推理は十八世紀佛國民の狀態を基礎とし、當時佛國民の大多數は單なる生存に要する必需品以上には何等必需品の觀念を持つてゐなかつたのである。『さりながら之よりも幸福な時

生存必需品と能率必需品

代には、一層細心な分析が行はれた結果(能率必需品と生存必需品との區別が重視されるに至り) 譯者「括弧内」 第八版に省略 或る時と場所とに於ては各産業層に二種の所得のあることが明かとなつた。その一は單に産業層所屬員を扶持するに必要な所得であつて多少とも明確に一定してをり、その二は産業層の全幅能率を維持するに必要な所得であつて前者よりも大なる所得である(10)。

(9) Curver, Principles of Political Economy, p. 474 参照。慣例的高雅品は結果に於て必需品であるとのアダム・スミスの説に私が注意するに至つたのはこの書による(譯者「第八版の新註」)。

(10) 即ち英蘭南部の人口は、移住を斟酌すれば過去百年間(譯者「第八版修正」)相當の率をもつて増加した。併し労働能率は以前英蘭北部に匹敵してゐたものが相對的に減少したために南部の薄給賃銀労働者が反つて北部の高給賃銀労働者よりも往々高價である。即ち吾々は必需品といふ言葉が右二つの意味の何れに用ひてあるかを知らなければ、未だ南部の労働者が必需品を享受してゐるか否かを言明し得ない。彼等は最低生存必需品 *bare necessities of existence* を有して人口を増加してゐたが、明かに能率必需品を有してゐなかつた。さりながら記憶しておかねばならぬのは、南部の最強労働者が絶えず北部に移住したこと、及び北部に於ては經濟自由が大であり且つ高き地位に進む希望も大であつたため北部の最強労働者の精力は高まつて

場所と時と
状態及び
生活習性
を考慮せ
ねばならぬ

ゐたことこれである。Curver (譯者「第八版修正」) Organization Journal, Feb. 1901. 誌上のマッキー Mackay の論文を見よ。

若し或る産業階級の賃銀が完全な賢明をもつて消費されるならば、この賃銀が一層高い能率を維持するに足りることも真であるかも知れぬ。併し必需品の評定は一定の時と場所とに相對的でなければならぬ。反對の特殊解釋句がない限り、賃銀は所論の産業階級間に事實行はれてゐる程度の賢明先慮没我をもつて費消されるものと推定していい。この點を理解した以上、産業層中の或る階級の所得の増加した結果程なく該階級の能率が比例以上に増加する場合には、増加前の所得を必要水準以下なりと言つていい。消費は習性の改變によつて節減されることがある。併し必需品の切詰めは反つて空費である(11)。

(11) 或る産業階級中の通常所屬員の場合には彼の作業の社會共同體にとつての實賃価値と、彼が之によつて收める所得とが密接に一致する。併し非凡能力を有する個人を考察する場合には、作業の實賃価値と所得とが恐らくかくの如く一致せぬ事實を考慮せねばならぬ。この個人がその消費の一部を削減すれば彼の能率は減少するが、この減少高が彼の消費節減高よりも彼或は彼以外の世界にとつて大なる實賃価値を有する限りは、彼の一切消費は嚴密に生産的且つ必要的であると云ふべきであ

ある。若し一人のニウトン或は一人のワットがその私生活経費を倍加して能率を百分の一増加し得たとすれば、この消費増加は眞に生産的であつたであらう。後に明かになる通り、かゝる場合は高い地代を生ずる豊地の耕作増加に似てゐる。收穫は以前の失費に比すれば此例以下であつてもなほ有利であることがある。

四 嚴密に能率必要品たる以下を消費するは空費である。傳習的必要品。

例解、不熟練労働者の必要品

「吾々は後に能率労働の供給を決定する諸原因を探究する場合に、各種作業者階級の能率必要品について少しく細目研究を行ふであらう。併し現代の英蘭に於ける一通常農業労働者或は一不熟練都市労働者とその家族との能率必要品如何を茲に考察するは、觀念をやゝ明確ならしめる助けともなるであらう。この能率必要品は、數室を有し排水施設の整つた住居、暖かい衣服、肌衣の著替若干、純粹の水、多量の穀物性食物、肉類牛乳の適宜量、僅少の茶その他、若干の保養及び最後に彼の妻が適切に母性的家計的義務を果し得るため他の作業から解放されること等から成つてゐる。若し何れかの地方に於て不熟練労働がこれら

必要以下消費は空費である

の何れかを奪はれるならばその能率は減ずる。恰かも手入の行届かぬ馬或は石炭の足りない蒸氣汽鐘と同様である。この限度に達する迄の一切消費は嚴密に生産的消費である。この消費を少しでも切詰めるは經濟的でなく空費である。

慣例的必要品

右の外に恐らく若干の酒類、煙草の消費、及び流行服裝への若干耽溺は、多くの場所に於て習性的となつてゐるから、之を慣例的に必要品たるものと言つていゝ。何故かなれば、平均の男女は之を得るがためにその若干能率必要品を犠牲とするからである。従つて彼等の賃銀が嚴密な必要的消費たるものを給するのみならず、なほ慣例的必要品 conventional necessities の若干量をも包含しない限りその賃銀は實際上能率に必要なより以下である(12)。

(12) ジョームス・ステュアート James Stewart, Inquiry, A.D. 17 67, II. XXI. §1 生理的的必要品、政治的的必要品。Physical and Political Necessaries の區別を参照。

生産的作業者が行ふ慣例的必要品の消費は通常生産的消費の中に分類される。併し嚴密に言へば然かすべきでない。紛らはしい重要箇所には特殊解釋

句を附記して、右慣例的必要品を含んでゐるか否かを言明すべきである。

さりながら注意すべきは、當然餘分の奢侈品と稱せられる多くの物の中にも、或る程度迄必要品に代る物があることである。それが生産者によつて消費される場合には、この程度に於てその消費は生産的である(13)。

(13) 例へば三月の青豌豆一皿の価格は恐らく十志であつて餘分の奢侈品である。併しなほそれは衛生食品であつて恐らくキャベツ三片分と同様の効果があり或は食物の多様性は疑もなく健康を益するから更にそれ以上の効果さへある。よつて恐らくその價值の中四片は必要品の項目中に入れ、九志八片は贅澤品の項目に入れていゝのであつて、その消費は四十分の一迄は嚴密に生産的であると見ていゝ。例外の場合例へばこの豌豆を患者に與へる場合には、十志全部の消費は有效であつて自己の價值を再現する。

必要品の評定は到底粗雑不正確たらざるを得ないが、觀念を明確にするため敢て之を評定して見たい。恐らく現在の物價に於ては、一平均農業家族の嚴密必要品は一週十五乃至十八志で求められ、慣例的必要品はその上更に五志で求められる。不熟練都市労働者の場合には嚴密必要品に數志を加へねばならぬ。熟練都市労働者家族の場合には嚴密必要品二十五乃至三十志、慣例的必要品十志としていゝ。多大の繼續的緊張を要する頭腦労働者の場合には、その者が自身者なれば恐らく前者年二百乃至二百五十磅であるが、家族の教育に多大の失費を要する者はその二倍以上である。その慣例的必要品は職業の性質による。

第四章 所得 資本

一 貨幣所得と營利資本。

廣義の所得

原始社會共同體に於ては各家族は略ぼ自足的であつて、自家の食物・衣服更に家計のための家具さへも大部分自給した。家族の所得或は收得の中、貨幣形態をとるのは極少の部分のみである。若し人が自己の所得なるものを考へるとすれば、料理用器具から受ける福利を算入すること恰かも犁から受ける福利を算入する如くであつた。富の蓄積高―料理用具も等しくこの中に屬する―の中、資本とその以外のものとの間に少しも區別を立てなかつた(1)。

(1) 右及び之に類似の事實があるため、一部の人は分配・交換の近代的分析の一部は到底原始社會共同體に適用し得ぬと推定するに至つた。之は眞である。併しその人々はかく言ふのみならず更に近代的分析の重要部分は一として適用し得ぬと推定するに至つた。之は眞でない。凡そ形式の多様性を貫く實質の統一性を發見するに要する多大の勞を回避して言葉の奴となるは危険であるが、右は即ちその著例

である。

貨幣所得に
對應して

併し貨幣經濟 money economy の發達と共に所得概念を貨幣形態にある收得にのみ限らうとする強い傾向があつた。この中には被傭者報酬の一部として貨幣支拂に代へて支給される『實物拂』 payments in kind (住宅の無料使用、石炭、瓦斯、用水の無代支給の如き)も入つてゐる。

營利資本が
ある

かくの如き所得の意味に調和して、市場地の用語は通常或る人の富の中彼が貨幣形態にある所得を得るために投ずる部分、或は更に一般的に言へば、營業による營利 acquisition (Erwerbung) に投ずる部分をその人の資本と見てゐる。之を彼の營利資本、trade capitalと言ふを時に便宜とすることがある。即ち營利資本とは或る人がその營業に用ふる外界財から成ると定義していい。彼はこの外界財を或は貨幣に換へて賣らんがために保持し或は貨幣に換へて賣る物を生産するために充用する。その顯著な分子中には工場及び工業家の營業施設即ち機械・原料・被傭者に支給せんがために工業家が保持する食料・衣服・住宅、及びその企業の得意等がある。

その最も顯
著な諸分子

彼の所有物の外に、彼の権利に屬し且つ彼の所得の源泉たるものを加へねばならぬ。その中には擔保或はその他の方法によつて行つた貸附及び近代『金融市場』の複雑な形態の下に彼の保持することあるべき一切資本支配力を含む。之に反して彼の負ふ負債は資本中から引去らねばならぬ。

右の如く個人的視點即ち企業の視點からする資本定義は日常用例の上に確固として確定してゐる。本書を通じて企業一般に關する問題特に一般市場に於ける特定種類の販賣貨物の供給に關する問題を論ずる場合には、一貫してこの定義に従ふ。本章の前半に於ては所得及び資本を私人企業の視點から論究し、後半に至つて之を社會的視點から考察するであらう。

二 日常企業の視點からする純所得・利子・利潤の定義。
純利益・經營收入・準地代。

若し或る人が企業に従事すれば、彼は原料・勞働雇用その他のために何等かの支出をなさねばならないに相違ない。この場合には彼の眞正所得即ち純所得

純所得

gross or net income は、その總所得 gross income 中から『その總所得を産み出すに要する支出』(2)を差引いて之を見出すのである。

(2) 大英學術協會 British Association (for the Advancement of Science) 委員會の所得稅に關する報告(一八七八年)を見よ。

或る人が直接・間接の貨幣報酬を受けて何事かを爲せば彼の名目所得 nominal income は増大する。然るに彼が自身のために致す奉仕は通常彼の名目所得を増すものとは計算されない。(それが些細のものたる場合には一般に之を無視するを最善とする。併しこの奉仕にも通常對價の支拂を受ける如き種類のものがあるから、この種類の奉仕は首尾一貫せしめるために之を考慮すべきである。即ち自身の服を作る女子或は自身の園藝地を掘り或は自身の住宅を修理する男子は所得を得つゝある。恰かもこの作業のために雇用されることある裁縫師・園藝家或は大工が所得を受けると同様である。

この點に關聯して吾々は以下頻繁に用ふべき一用語を導入したい。この用語を用ふる要は次の事實から生じて來る。即ち總ての職業はその職業に要す

純利益の暫
定的定義

る作業の疲勞以外になほ他の不利益 *disadvantage* を伴ひ、總ての職業は貨幣賃銀 *money wages* 受取高以外になほ他の利益 *advantage* を提供するといふ事實である。一職業が勞働に對して提供する眞正報償 *true reward* を算出するには、その一切利益の貨幣價值から一切不利益の貨幣價值を差引くべきである。この眞正報償をその職業の純利益 *net advantage* と呼びたす。

資本利子

○ 借主が借入金(假りに)一年間の使用の對價としての支拂高は、この支拂高の借入金に對する比率をもつて言ひ表し、利子 *interest* と呼ぶ。この用語は更に一層廣義にも用ひられて、資本 *capital* から生ずる全所得の貨幣等價を言ひ表す。それは通常借入金の『資本』額に對する一定歩合として言ひ表される。かくする場合にはその資本を物一般の保有高と見てはならない。物一般を表すべき一特定物即ち貨幣の保有高と見ねばならぬ。即ち百磅は年四歩即ち四磅の利子をもつて貸附けられることがある。或る人が企業に各種の財の資本高を用ひ、この高は全體で一萬磅に價するとする。すればこの資本高を構成する物の總體貨幣價值に變化なしとの假定の下に、年四百磅はこの資本に對する四歩

利潤

の率の利子を表すと言つていい。さりながら彼は右の資本高から受ける全部純利得 *total net gains* が、現行利率に於ける資本利子を超過すると期待しなければ企業を繼續するを欲せぬであらう。これらの利得は利潤 *profits* と呼ばれてゐる。

自由資本或は流動資本

○ 一定貨幣價值だけ財を支配する力 *command over goods* であつて如何なる目的にも充用し得るものは往々『自由』資本或は『流動』資本 *free or floating capital* と言はれてゐる(3)。

(3) クラーク Clark 教授は純粋資本 *Pure Capital* と資本財 *Capital Goods* とを區別すべしと唱へた。前者は靜止不動の濼に當り、資本財は特定水滴が濼を通過するが如く企業に入りては出づる特定物である。勿論教授は利子を純粋資本に結び付けるので資本財と結び付けるのではあるまい。

經營收入

○ 或る人が企業に従事する場合には、その年度の彼の利潤は、同年度の企業から來る受取高が企業支出を超過する高である。營業施設材料その他の資産高の年末・年初の價值差額は、その價值の増減によつて或は受取高の一部となり或は支出高の一部となる。その利潤中から現行率による資本利子を差引(必要なら

ば保険料をも差引いたものを一般に彼の企業収入或は經營收入 earnings of undertaking or managementと呼ぶ。その資本に對する該年度利潤の比率は利潤率 rate of profitsと言ふ。併しこの語句は利子に關するその對當句と同様、彼の資本を構成する諸物の貨幣價値の評定を前提とするものであつて、かゝる評定は往々多大の困難を伴ふことがある。

住宅・ピアノ・マシン機械の如く、何等かの特定物の賃貸しを爲す場合には、之が對價たる支拂を往々レント Rent と呼んでゐる。經濟學者も個人營業者の視點から所得を見つゝある場合にはこの用例に従つて別に不便はない。併しやがて論ずる通り、業務事項に關する論究が個人的視點を離れて社會全般の視點に移る場合には、レントといふ用語を自由(無償)の自然恩惠から生ずる所得のみに限るのが寧ろ穩當である。この理由によつて本書に於ては、機械その他人工による生産要具から生ずる所得には準地代、Quasi-rentといふ用語を用ふるであらう。即ち或る特定機械は地代の性質を有する所得を生み、この所得は大體に於て之を準地代と呼ぶ方が幾分便利のやうであるにも拘らず、時にレントと呼ば

地代と準地代

れてゐる。併し吾々は機械が利子を生むとは當然言ひ得ない。若し「利子」といふ用語を用ふるとすれば、それは機械自體に關するものではなく、機械の貨幣價値に關するものでなければならぬ。例へば百磅をもつて得た一機械の營む作業が一年純四磅に價するならば、この機械は四磅の準地代即ち原費用の四歩の利子に等しい高を生みつゝあるのである。併し若し機械が現在僅かに八十磅に價するものとすれば、それはその現在價値の五歩の準地代を生みつゝあるのである。さりながら之は原理上の若干の難問題を生ずる。これらの問題は第五編に論究するであらう。

三 私人の視點から見る資本の分類。

次に資本に關する若干細目點を考察する。從來資本を消費資本 Consumption capital と補助資本或は要具資本 Auxiliary or Instrumental capital とに分類した。尤もこの二種類の間には鮮明な區分線を引き得ないけれども、これらの用語の曖昧なことを理解しおくに於ては之を用ふるも時に便宜なことがある。明確